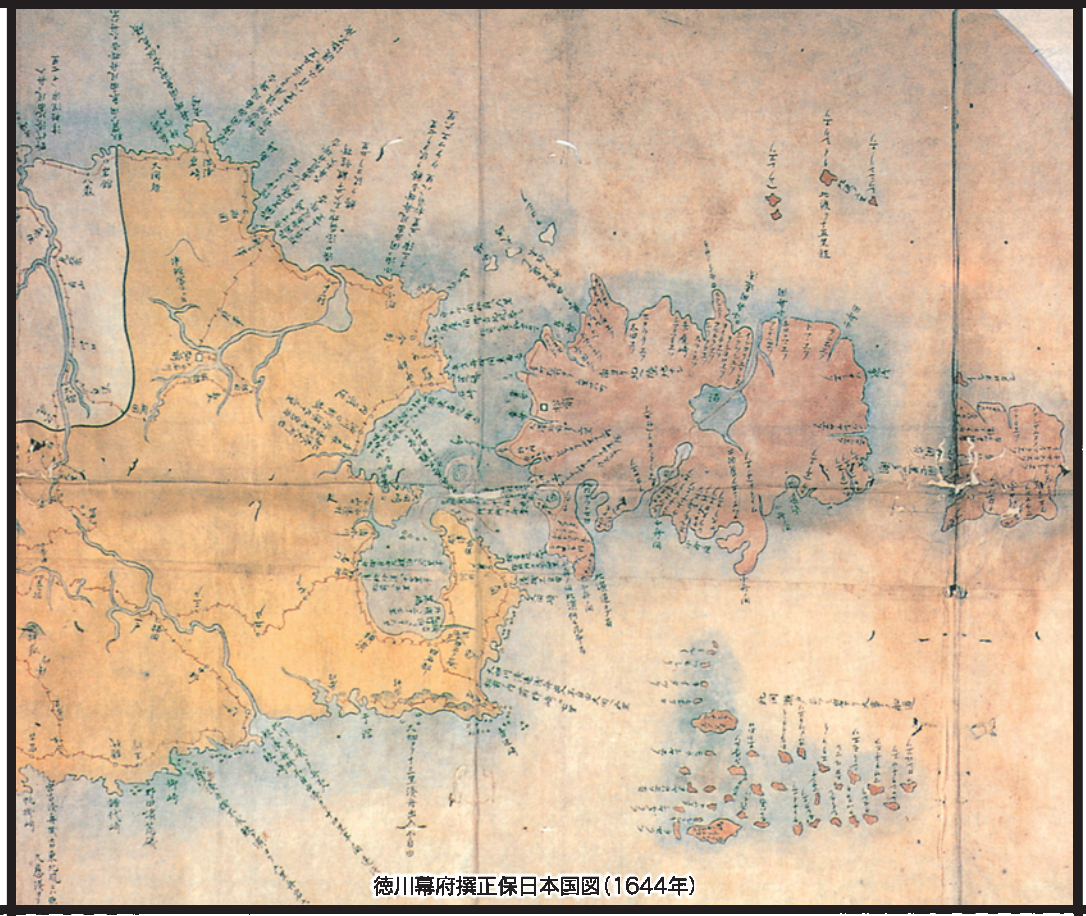
元島民の訴え

平 成 21 年 度

北方領土の早期返還を求めて

第20回「元島民の北方領土を語る会」集録

日本が北方領土の返還を要求するのには歴史的・国際法的に正当な根拠があります。



徳川幕府撰正保日本国図（1644年）

主　　催／外　務　省

実施団体／社団法人 北方領土復帰期成同盟

もくじ

1　平成21年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況 …… 2

2　「元島民の北方領土を語る会」　元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

【宮崎県会場】 …… 3

○北方領土の早期返還を求めて　鈴木寛和（勇留島）

○北方領土返還運動について　永田しのぶ（北方同盟）

【山梨県会場】 …… 11

○ソ連軍の不法侵攻と強制送還
　この悲惨な事実を後継者につなぐ　得能宏（色丹島）

○北方領土の早期返還を求めて　吉田義久（水晶島）

○北方領土返還運動について　山崎隆（北方同盟）

【北海道会場】 …… 19

○北方領土の早期返還を求めて　三上洋一（択捉島）

【香川県会場】 …… 27

○北方領土の早期返還を求めて　河田弘登志（多楽島）

○北方領土の早期返還を求めて　木村吉伸（水晶島）

○北方領土返還運動について　山崎隆（北方同盟）

【大分県会場】 …… 37

○北方領土の早期返還を求めて　児玉泰子（志発島）

○島への想いを継ぐ　神林美砂（志発島）

○北方領土返還運動について　梶武廣（北方同盟）

3　平成21年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱 …… 47

1　平成21年度「元島民の北方領土を語る会」開催状況

開催月日／開催都市 開　催　団　体	参加者 （人）	語り手 出身島	プ　ロ　フ　ィ　ー　ル
6月10日㈬ 宮崎県宮崎市 宮崎県地域婦人連絡協議会	94	鈴木　寛和 (78) 勇留島	職　　業 団体役員 昭和６年10月 勇留島生まれ 昭和７年５月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟副理事長(現在に至る) 昭和12年５月 ㈳北方領土復帰期成同盟監事(現在に至る)
7月28日㈫ 山梨県富士吉田市 山梨県連合婦人会	170	得能　　宏 (76) 色丹島	職　　業 自営業（水産加工業） 昭和９年２月 色丹島生まれ 昭和22年10月 強制送還 平成６年４月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟根室支部長 平成12年４月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟援護委員
		吉田　義久 (72) 水晶島	職　　業 行政書士・建築士 昭和12年８月 歯舞諸島水晶島生まれ 昭和20年８月 水晶島へ引揚げ 昭和60年11月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟理事(現在に至る)
11月19日㈭ 北海道札幌市 北海道女性団体連絡協議会	50	三上　洋一 (72) 択捉島	職　　業 農業博士・技術コンサルタント 昭和12年４月 択捉島留別村生まれ 昭和22年秋　強制送還 昭和38年４月 日本専売公社（たばこ産業）入社 本社特許室長、海水総合研究所長など歴任
平成22年１月26日㈫ 香川県高松市 香川県婦人団体連絡協議会	200	河田　弘登志 (75) 多楽島	職　　業 団体理事 昭和９年９月 多楽島生まれ 昭和20年11月 多楽島より引揚げ 平成９年５月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟理事(現在に至る) 平成12年４月 ㈳千島歯舞諸島居住者連盟根室支部長(現在に至る)
		木村　吉伸 (39) 志発島(二世)	職　　業 落語家 昭和45年10月 根室市生まれ 平成２年４月 三遊亭金馬に入門 平成５年11月 二ツ目に昇進 平成14年３月 真打に昇進
平成22年２月９日㈫ 大分県別府市 大分県地域婦人団体連合会	400	児玉　泰子 (65) 志発島	職　　業 北方領土返還要求運動連絡協議会事務局長 昭和19年10月 志発島生まれ 昭和22年　強制送還 平成８年　総務長官表彰「北方領土返還要求運動功労賞」受賞 平成21年　㈳千島歯舞諸島居住者連盟理事(現在に至る)
		神林　美砂 (48) 志発島(二世)	職　　業 会社役員 昭和36年　根室市生まれ 昭和61年　東京たばこサービス㈱入社 平成11年　㈲ジンアドバタイジング

2　「元島民の北方領土を語る会」

元島民の訴え～北方領土の早期返還を求めて

【宮崎県会場】

●開催日時　　平成21年６月10日㈬　　10時00分～11時30分
●開催場所　　宮崎県婦人会館
●開催団体　　宮崎県地域婦人連絡協議会
●参 加 者　　94名

元島民の訴え



北方領土の早期返還を求めて

鈴　木　寛　和さん

皆さんこんにちは。先程から何度かご紹介を頂いて恐縮をいたしております、千島歯舞居住者連盟の副理事長をしております、鈴木でございます。平素は、谷口会長さんをはじめ県下の婦人会の皆さんには大変お世話になっておりますし、九州地方は、地婦連の方々をはじめとして多くの昆布で利用して頂いている、私歯舞漁協の役員の一人でもございます。

当時13才で島を脱出して逃げております。ちょうどソ連軍が勇留島に侵攻して上陸したのが、９月の３日の日でございます。ですから、当時ソ連の兵士が銃剣を撃ちつけるような形で上陸して来るとは誰も思っておりませんでした。そういう中で遡った説明をいたしますと、北方四島全体は5,036平方キロありますけれども、勇留島は周囲わずか12平方キロの小さな島です。

今、この旗の図を見ると良く判るんですが、ここが歯舞群島の一角なんです。一番大きな島が志発島、それから水晶島、勇留島、秋勇留島となってます。一番皆さんがよく行かれるのが国後島なんです。それから択捉島は当時、国後島よりも人口が少なかったんです。全部合わせて17,200名余りおりました。勇留島はわずか500名程の人口でありました。

私も当時、島の尋常小学校で６年生まで島の学校へ上がっておりましたし、そのあと即、中学校に上がりたいという意志から根室に出させていただきました。時悪く、終戦の一ヶ月前に根室に米軍の艦載機による大空襲が二日間に亘って行われました。町の中心部は、もう８割方全部消失したと。それから、根室港は当時の死野という満州とも言われてた地域もありますけれども、昆布だとか干し鱈をはじめ、乾物を根室港から積み出して今の中国の方に輸出していた経緯があります。魚なども、缶詰類はほとんど西側のドル稼ぎに輸出をしていた。

全体を見ますと、日本の政府が明治の末期から大正の初期にかけて、大変国家予算が希薄状態になって、国民の生活もままならない状況があった中で、唯一国家の予算が昆布に助けられたという時代がありました。これは

もう有名な話なんです。その昆布は、ほとんどこの勇留島から色丹島にかけて生産されておりました。金額を申し上げますと、大体北海道で今生産される水産物の４分の１くらいが北方四島で生産されていた。ものすごい金額なんです。

そういう中で、私も小学校まで勇留島で義務教育を終えて、その後根室を出て先ほど申し上げました米軍の艦載機によって学校が休学状態になってしまって、再び島に帰って参りました。

その帰った８月28日に、この定期船が南千島に送る郵便を配送する最後であろうと、こんなふうにいわれている船に私は飛び乗ったわけです。で、それはどういうことかと言ったら、要するに根室にもソ連軍が上陸するという情報が入って参りました。根室にもソ連軍が侵攻してくるんであれば島に帰っても同じだと、こういう意思のもとで帰ったわけですけれども、結果は違いましたけれども、28日に帰って９月の３日ですから、わざわざソ連軍に拘束されるために島に戻ったような形になったわけです。

極めて当時は、もう何が何だかわかんない、もう生活は壊れる、厳しいソ連軍の監視下に置かれるということで、何でこんな時期に根室にいないで帰ったんだろうなあと、その時はそう思いました。

私が島に帰りたいと思った一つの理由はですね、勇留島と言うのはやっぱり海洋資源にも恵まれておりますし、それから北海道で採れる野菜や一部の食料についても結構育つわけです。採れないのは米と麦くらいなもので、あとはほとんど畑で採れるものが育つ。ですから、あとは米を買えば越冬しても冬期間の生活は成り立つような状況の環境にありました。うちの親たちも大変だったろうと思ったのは、私は８人兄弟の一番長男だったわけです。今考えても、８人の子供を養うということは大変な事だと思うのです。ただ、幸にそれだけ自然に島が恵まれていたということはいえるだろうと。だいたい海で採れる魚をはじめ、田畑で採れるものは米さえ除けばほとんど採れる。あとは燃料の確保だけあれば、３ヶ月や４ヶ月の越冬生活はままなる。そういうことで、やっぱり島に対する思いというものは、根室にいて条件の良い生活環境にあっても、島に帰りたいという当時でも思いがあったわけであります。

当時小学校には30名位の生徒がいたと思います。もう、当時から男女共学でどっちが男だか女だかわからない子供がたくさんいたわけで、それはそれはもう、やんちゃ坊主ときかないお嬢ちゃん方の集まりみたいな感じで、元気でたくましい子供ばっかりだったという風に、今でも感じております。

島で人間の手助けに唯一なったのは馬なんです。勇留島にも馬は約230頭くらいおりました。何で人口が500人程度の島に、馬が230頭もいるんだって。当時、日本の兵隊さん方の中で軍馬として馬を徴用に課けて満州、更には死野という大陸に、銃器弾薬を搬送するために随分使った様であります。そのために島で馬を育てるということがあったようで、どこに行くにしても一里や二里、一里というと大体４キロになりますけれども、その道のりはほとんど馬で歩く。

それから朝、出漁をして夜帰ってくる時に、採ってきた昆布を運ぶのも馬で運ばせると。まあそんなことで、動力替わりに随分馬を使って馬共々の生活をしていた長い時代があります。今でも、島に２度ほど行って参りましたけれども、馬頭観世音の碑が、大きな碑が今でもコンクリートの土台の上に立っております。

これは自由訪問という、島民だけが、島民の妻帯者と２世まで参加出来るわけですけれども、「３世、４世まで自分たちがかつて住んでいた居住地の訪問を、幅を拡げてください。」こういうふうに申し上げて、お願いをしてございます。まあ昨年から、どうにか孫の一部について認められた。私も２年前、自

分が元気なうちに息子に何とかその辺の事を、事情をよく見せて、説明をして言い残しておこうと思って一緒に行って参りました。

単に12平方キロといえども、上がってみると大きな島だということがよくわります。太平洋側もあり、日本海側もあり、小さな島であってもやっぱりいろんな野生群が広々と広がっておりますし、今はもう北海道では見れない野鳥でも北極ギツネまでがいるというような状態があります。

なぜ勇留島に北極ギツネがいるんだということになりますと、当時の先輩方は島に住んでいて春から秋までの稼ぎが出来る。昆布であろうが、タラや蟹やホタテを採っても生産して売ればお金になる。しかし冬は何にも無い。そういうことから銀ギツネの養殖を始めたわけです。

これはやっぱり、島の人方の知恵であったろうと。アラスカあたりで獲れるキツネの皮とは全然違うんですが、僕らも初めキツネというものは白いものだというふうに思っておりました。それが北海道へ引き揚げてからはじめて「あ！赤いキツネがいるんだなあ」ということが判って、キツネそのものが赤いのだと判りました。島民の方が育てていたのは、北極の銀ギツネであったわけです。それが今でも、かなり数が増えているということを聞かされてホッとしました。

そしてまた、根室からの通常の生活物資の搬送についても、月２回程の定期船の運行がありました。これはあの、郵便局の〒の字の旗を立てながら島に郵便物を配送して歩く。帰りには、船がまあ船荷しか無くなりますし、船倉が少し空くとそこに島民が作ったであろう海産物を積み込んで、根室に出荷する。そういうことで結構賑わいました。

それと一番、我々を楽しませてくれたのは富山、石川県から置き薬の行商の薬屋さんが島に随分入ってまいりました。段々重ねの行李、段々上へいくと小さい行李になるわけですけれども、その薬屋さんが風船やいろんな遊び道具を一杯提供してくれます。これはやっぱり薬を使用するわけですから、お医者さんの全くいない中ではもう置き薬で一時的に合わせるようりしょうがない。島の人方も、薬の足りない面については幾分知恵があったわけですから、今でいうゲンノショウコですとか、それからミミズを熱冷ましに干して飲ませるとか、いろんな事をやって子供方また病人に対応していたようです。

薬屋さんの来る時は本当に色んな情報を持って来てくれますし、それから言付けや何かでもやっぱり薬屋さんが扱ってくれたものはちゃんと北海道へ帰ってから言っていただける。こういうことで今の北方四島のつなぎ役として、また開拓者としての富山、石川県人会の人達のそうした行動は、すごく島に大きな影響を与えていたんであろうと思っております。

北前船や色々な話もありますけれども、我々がやっぱり一番欲しかったのは他島の交流だったわけで、島にいるとそれだけしか判らない。非常に良い環境だったのは、この歯舞群島には５つの島があります。大きな島から申し上げますと、志発島、その次に水晶島、その次に勇留島、多楽島、秋勇島とこういうふうに５つの島があります。この島が、今これから丁度シーズンになるわけですけれども、学校の運動会の季節になると島々の交流が始まります。「今日は勇留島の尋常小学校の運動会だよ」というと各島から全部の学校の校旗を持って対抗試合に島に入って参ります。

それからまた９月になりますと、島のお祭り行事はだいたい９月になってますので、島々でそれぞれ日にちをずらしながら、お互いにバッティングしないような形でお祭りをします。そこに島々がまた出向いてお参りをさせてもらう。こういう極めていい関係に島々はあったわけで、何処々の島だから知らないってことはまずなかった。お互いに交流し合う。それはやっぱり、ある意味で子供達

がその大きな力になっていたんでなかろうかなとこんなふうに思っております。

最も、我々が島にいて今でも思い出すのは、もう５年生から６年生になるとどこの家庭でも一人前の大人として扱ってくれてました。その代わり、その跳ね返りがまたすごい。「お前達は大人だから一生懸命やんなさい」というふうにして、家業である昆布であろうが漁業の手伝いを、もうふんだんなくさせられる。それがまた、当たり前だと思ってました。

ですから親が、「今日は晩飯、おかず何にも無いよ。今ストーブに鍋をかけておくから、お前達何処かそこらいって魚でも釣ってきなさい」こんなふうに言うわけですね。やっぱり釣るのと網を刺して捕るのでは大分違うもんですから我々も考えまして、２人か３人で共同して５年生か６年生の子が小さな伝馬船で10メートルか20メートルの網を海に刺し入れて仕掛けしてくるわけです。それは次の日行くと、カジカやカレイやそれからホッケなどが、もう自分の家で食いきれないだけ、余るだけ掛かる。捕った魚はどうするのか。雑貨屋さんやお店屋さんが小さくても島にはあったんです。そこのおばさんなりおばあちゃんが「お前達また持ってきたか？何持ってきた？」っていうと魚一本一匹に対して何かを交換してくれるんです。そしてお金がなくても物は買えるような、そういう物々交換のことまでの勉強をしたわけではないのですが、自然と覚えたりして結構大人並みの生活を子供方もしておりました。

やっぱり今と違うのは、あの頃そうだよなっていうのは遊び道具は全部自分達で作りました。やっぱり島には木が１本もありません。したがって、木の材料が欲しい時にはその辺で流れ着いた材木を拾ってきて、それを切ってまた削るとかということで、まあ、木芸船を作って帆をかけて湖で放すとか、色々な事をやりましたけれども、当時はもう手や腕は傷だらけだったわけです。上手に大工道具を使えない、使う道具が全然切れない、こんなことでお互いに傷の長さや深さを比べあったことも、今思えば懐かしい思い出だというふうに思います。

そんな島の生活が忘れられない私だったものですから、その当時やっぱりソ連軍が侵攻しても島から当時は逃げようとは思いませんでした。何が逃げるきっかけになったかと言いますと、彼らが９月３日に勇留島に上陸して以来、段々様子が変わってまいりました。

10月の下旬になってから、少し毛色の変わった連中が入ったなあと思ったら、向こうの国境警備隊の上の方のクラスだと思うのですが、「君らは今後全てソ連国籍になるよ。それから今持っている財産全ては国家財産になる。従って、今後島を自由に今までのように勝手に散策するわけにはいかない、行動するわけにはいかない。必ず通行証を携帯した上で行動しなさい。」その頃使っていた漁船も全部拘束されました。ある船については、水を入れて沈めてしまう。これはやっぱり、自分達の領土だと言うためにはそこには国民がいなければ駄目だ。ロシア国籍のソ連国籍の国民がいなければ駄目だ。軍政府は北方四島全体を軍政下に置くために、そうした厳しい姿勢に出てまいりました。

まず、それまでに何人か島を脱走して見つかって、銃撃されて亡くなった方も何人かおりましたし、死んでもいいやと家族ごと島を脱出して、海没して亡くなった方もおります。一番悲惨だったのは、国後島が一番大変だったろうなと思っております。国後島と日本の北海道の距離、わずか６キロか７キロしかない地域があるのです。そこを、目と鼻の先ですからどうしても逃げたくなる。ロシア人に捕まるくらいなら、死んでもいいと一家５人が海没して亡くなったという事故もありましたし、それを見かねた村長さんが、ロシア側の当時のソ連軍の軍士と色んな事でやり合って、家族の目の前で銃撃されるという事件もありました。名前をはっきり申し上げますと、沢田喜一郎さんという村長さんが、家族の目

の前で銃撃されるということもありました。

それから択捉島でも一回あったのは、これは日本軍を、脱走した日本軍を匿ったということで銃殺されたということもあって、こういう生臭い話はあまり正面に今まで出ておりません。私共も、島にいる間に大体20歳前後の若者が約23名、強制労働に連行されました。延べ23人ですから、一回に23人行ったわけではない。それから新婚早々に子供もいながらやっぱり連行されたという女性の方もいたようであります。

連行された人のうち約、約というか男性が一人、女性が４名、５名、いまだに行方知れずです。未帰還者です。一番可哀相なのは、今申し上げました乳飲み子の居る母親が連行されて、帰って来なかった。これはやっぱり、未だに家族の人方から「鈴木さん、この問題はロシアに言っても本人が帰ってくるわけじゃないけれもど、死損なんですか？」と今でも問い詰められます。全く、我らにとってはもうやり場のない感情で一杯なんです。私も四島に訪問する際に「日本人の墓がどっかにあるはずだ。君たち知らないか？」と言って判る人にロシア人が誰もおりません。そういう中でかつての島の生活を思えば、今一日でも早く島に帰りたい、還してもらいたいという気持ちは、今の一世の人方については、なお強いんだろうなあと思っております。

私どもが、何で四島一括なのかということなんでしょうけれども、千島連盟というのは４つの島から引き揚げて還って来られた人方だけで構成させれてます。それを２だとか３だとかになれば自分達の組織を、自分の手でもって解体するに等しい。ありえない話だと、こんなふうに申し上げております。しかしこれは正面切って言える話ではないとしても、国内の世論形成にはやっぱりスローガンとして何としてもその声だけは聞いて欲しいと、こんな思いで四島一括返還を唱えているわけでございます。

今、北方四島には52ヶ所の墓があります。それと、埋葬されております肉親や先輩や家族の遺体数が4,457人おります。これは、国が調べてる数字なのでほぼ間違いないだろうと、こう思っております。こうした人方が四島の墓地にそのまま眠ってる訳です。そのことを考えれば２島だ３島だと言ってるような議論はどこにも沸いてこない。そんなふうにも思っております。

ですから、私たちの立場では首脳会談が何回あろうとも、首脳会談よりも島を還してもらうことなんだよって事を言いたいのです。返還運動は、四島を還す事と返還運動は違う。あくまでも四島を還してもらう事が我々の最終結論だ、四島が還って来ない限りは、我々の戦後は終わらない…こんなふうに今思っております。ですから、できるだけ皆さんにこうした機会を頂いて島民が本当に今何を考えているんだ、ということをやっぱり聞いて欲しいという思いで一杯なんです。

イタリアで７月に首脳会談が、Ｇ８会談が行われますけれども果たしてどうなのかな、という思いは個人的には私はあります。昨年の11月、更に本年の２月、更に５月の東京での首脳会談を通してみても、本当にロシアは領土を還す気があるのかと言いたくなるような感じです。私は個人的に、ただ聞いているだけではおかしくも面白くもないので、今回の首脳会談は何点をつけたらいいだろう、ということを毎度やっております。

昨年の洞爺サミットが仮に70点だとすれば、現在まで数回繰り返された首脳会談、現



在のとこでは60点止まりだ。そんなふうな評価をして、更に70点80点を差し上げたいとすれば、イタリアの７月の首脳会談では、はっきりしたけじめをつけた外交交渉をして欲しいと、こう思っております。

丁度時間がきましたので、まだまだ言いたいことは一杯あるわけですけれども、どうかこれからも谷口会長さんをはじめとした婦人団体の皆さんには、北方領土に少しでもご理解をいただいて、署名活動なり返還運動にまたご協力いただければ大変有り難い、こう思ってお話しを終わります。

大変ありがとうございました。

北方領土返還要求運動

北方領土返還運動について

社団法人北方領土復帰期成同盟　主事　**永　田　しのぶ**

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の永田でございます。

本日は、宮崎県地域婦人連絡協議会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」がこのように多くの皆様のご参加を得て開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしなどを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

折角の機会ですので、貴重な時間をお借りして、北方同盟が進めております「北方領土返還要求運動」と最近の北方領土問題につきまして、ご紹介をさせて頂きます。

お手元にお配りしております、「北方同盟の組織と事業の概要」を、ご覧いただきたいと思います。

はじめに、「北方同盟」についてですが、１ページ目をお開き下さい。

見開きの右下に、北方同盟の沿革が書いてあります。北方同盟は、北方領土返還要求運動を主たる目的とした、外務大臣許可の公益法人でございます。

さて、北方領土でございますが、お手元の「語る会のパンフレット」の裏表紙をご覧下さい。

ここに、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島は、大きな島です。それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、４島合わせて　5,036平方キロメートルもあります。

数字を聞いても大きさが解りにくいと思いますが、宮崎県の面積が約7,734平方キロメートルですから、四島を合わせると宮崎県の２／３程度の面積となります。

因みに、沖縄本島1,206平方キロメートルと比べても、国後島や択捉島が大きな島だということが、お分かりになっていただけると思います。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年８月下旬から９月上旬

にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長安藤石典（あんどういしすけ）氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件が続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

以来、64年に亘り、私たち国民が一丸となって返還要求運動を推進し、政府においては、「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年からは首脳レベルを含む会談が頻繁に行われるようになりました。

昨年７月に北海道で開催された「北海道洞爺湖サミット」の際の日露首脳会談では、**「戦略的に重要な隣国である両国間に平和条約が存在しないことは、幅広い分野における日露関係の進展にとり支障になっていること」「平和条約については、日露間の領土問題を最終的に解決するものでなければならないこと。」**などの共通認識が確認され、11月にペルーのリマで行われたAPEC首脳会議の祭の日露首脳会談では、**「来年予定される一連の首脳レベルの会談を念頭に、今後必要となる作業に言及した上で、具体的な作業に入るよう、事務方に指示をおろす」**ことで一致しました。

また、今年２月のサハリンにおける日露首脳会談では、**「この問題を我々の世代で解決すること」「これまでに達成された諸合意及び諸文書に基づいて作業を行うこと」「メドベェージェフ大統領が指示を出した、新たな、独創的で、型にはまらないアプローチの下で作業を行うこと。」「帰属の問題、即ち、国境の画定の最終的な解決につながるよう作業を加速すべく追加的な指示を出すこと」**で両首脳が一致を見ました。

さらには、先月５月12日に来日したプーチン首相との会談において、プーチン首相も北方領土問題について「ロシア国内にはこの問題を解決しないままでこのまま進もうとする考えもあるが、自分はそうは思わない。」との発言があり**「メドベェージェフ大統領は７月のイタリアでのサミットの際の日露首脳会談で北方領土問題について詳しく話す用意がある」**との説明がありました。

このことからも、７月に開催されるイタリアでのサミットにおいて北方領土問題の前進があることを期待しているところです。

また、北方同盟としましても、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を、強力に支えて行くこととしております。

また他方で、最近の北方領土について、皆さんもニュースなどでご覧になっていることと思いますけれども、人道支援物資供与の中止、第１回目のビザなし訪問の中止などがありました。いわゆる出入国カード問題です。

この問題については、今年のビザなし第１陣の訪問前に解決されましたが、ロシア側の国内での手続きが間に合わず、残念ながら５月15日出発予定の第１回目は中止となってしまいました。しかし、翌週22日からの第２回目からは従来通りの手続きで無事に訪問を終えました。

ここで、少しビザなし交流についてご説明したいと思います。このビザなし交流は、平成３年４月、当時のゴルバチョフソ連大統領が来日した際、ソ連側より**「日本国民と北方四島在住ソ連人との交流の拡大、日本国民による北方四島の簡素化された無査証の枠組みの設定」**が提案されました。

その後、日本とソ連のとの合意により、「領土問題を含む日ソ間の平和条約が締結される

までの間、相互理解の増進を図り、もってそのような問題の解決に寄与することを目的として日本国民と北方四島在住ソ連人との相互訪問を旅券・査証なしで行うこと」などを内容とする新しい枠組みとして、いわゆる「ビザなし交流」が作られました。

このようにビザなし交流は、北方領土問題解決のための環境整備という重要な事業であり、またビザなし訪問の他に北方領土墓参、元島民の方々のふるさと訪問である自由訪問などは、限られた機会にしか四島に帰ることの出来ない元島民の方々の貴重な訪問です。

これら北方四島への訪問事業が、これからも円滑に進むことを強く願っております。

では続いて、北方同盟の主な事業をご紹介したいと思います。

今一度お手元の、「組織と事業概要」4ページを開いていただきたいと思います。

Ⅰ世論の結集と啓発活動、Ⅱ返還要求運動推進活動、Ⅲ後継者育成活動の三つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、Ⅲ後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて64年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継でいくことが大切です。

それでは、後継者育成事業についてお話をさせて頂きます。1つ目は、「北方領土問題教育研究セミナー」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に、教育セミナーを開催することとしております。

2つ目は、「第24回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に3つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学5年生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校5年生全員に配付しております。

最後に4つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

なお、このパンフレットの裏表紙に北方同盟のアドレスを記載いたしておりますので、是非、皆様方にホームページをご覧頂ければと思います。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで下さい。何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

【山梨県会場】

●開催日時　平成21年７月28日㈫　10時00分～12時00分
●開催場所　ハイランドリゾートホテル
●開催団体　山梨県連合婦人会
●参 加 者　170名

元島民の訴え



ソ連軍の不法侵攻と強制送還 この悲惨な事実を後継者につなぐ

得　能　　宏 さん

ただ今ご紹介頂きました、元島民色丹島の得能宏です。本日は富士吉田市の婦人団体の皆様の前で、元島民として故郷北方領土のお話しをする機会を頂き、心より感謝申し上げます。また、日頃から北方領土返還運動に深いご理解とご努力に心から敬意を表します。

皆様に話すのは戦前戦後の島の暮らし、そして終戦後ソ連軍の不法占拠の話です。戦争により多くの国民の人達の深い悲しみと悲哀があり、言葉では言い表せない大きな悲しみと怒りが混在した歴史です。この事実を後世に伝える活動に、多くの人々が参加されていることに敬意を表します。

北方領土返還運動も山梨県民をはじめ、多くの方々の返還運動のおかげで全国運動に広がり、意を強くしています。あくまでも四島を、必ず四島を取り戻す、そんな思いを語り続け戦後はまだ終わっていないと云うのが実感です。

私の生まれた色丹島は美しい山々、多くの高山植物が村人達の心を憩い、海岸には天然の良湾、入り江を有し、海には豊かな魚族資源、そんな恵まれた島でした。そんな部落の人々は親類、親戚同様のつながりを大事に暮らしていました。

私の祖父は1868年（明治元年）富山県黒部で生まれ、20代前半の時に根室に入り、北の海の開拓に汗を流し、やがて北方領土の一つ色丹島に漁業基地を置き、幾多の困難に遭いながらも多くの人々と力を合わせて島の開拓を進めたと聞かされています。血の汗を流しながら長い年月をかけ、部落民はようやく安住の地を得ることが出来たそうです。

昭和20年８月15日、部落民は数少ないラジオの玉音放送により日本の敗戦を知りました。それからわずか２週間後の昭和20年９月１日、この日の朝何の前触れもなく島の北西側にある斜古丹湾、ここは天然の良港として知られているところですが、その湾に不似合いな真っ黒い軍艦２隻が堂々と侵入してきました。あっという間の事の様に覚えています。

小学校４年の私は、この朝初めて恐ろしい出来事に遭遇しました。日本人よりはるかに大きいソ連人６、７人が土足のまま学校に入ってきて、まるで子供達を殺しに来たように思えました。銃剣、ライフル銃を構えていて、とし先生は生徒に落ち着くように言いながら、ソ連兵と向き合っていました。その頃、

部落では大変な状況だったそうです。約700名のソ連兵が上陸し、民家を襲い銃剣を突きつけ、家探しをして金品を奪ったソ連兵も多かったようです。そして若い娘さんがいる家では、娘の身を守るため様々な方法を取ったそうです。この日を境に、島の運命は悲惨な現実へ転がり落ちて行ったのです。

やがてソ連軍は民家を次々と没収し始めました。追い出された村民は、物置や知人の家に間借り生活になり、毎日がソ連軍の監視下にあり恐ろしくて外にも出られない日々が続き、そして島を脱出する住民が増えてきました。厳しい監視の目を逃れ暗闇の海へ、また荒れている海を選んで小さい持ち船に家族や知人を乗せ、エンジン音を消し、灯火も消し無謀な死を覚悟の脱出、多くの船は無事根室へ着いたが、不運にも遭難した人々もいた。

島に残った島民は、その後３年間ソ連人と共存生活することとなりました。この３年間、残った島民には言葉には言い表すことの出来ない日々の生活でした。ソ連人の数がはるかに多い混住の暮らしの中で、祖父は若い時代から60年命をかけて築いてきた生活の全てを奪い取られ、翌年の５月、心痛のあまり病の床についた。その時私は12歳でした。

祖父が床の中で、幻覚症状による船の櫓を漕ぐ仕草や、網をたぐる仕草を見たとき母と共に涙を流しました。死が近いことを知った部落の中心的な人達は、祖父の長男で43歳軍人であり、樺太の北部に抑留されているだろう息子に逢わせるべくソ連軍に願ったが無理だった。

昭和21年７月18日、無念の死を迎えました。斜古丹墓地での荼毘、黒い黒い煙が天高く昇っていた、今でも脳裏に重く残る一つです。私が故郷色丹島の墓地を訪れ、そこに眠る祖父と会い60年を越える昔の思いに立ち戻り、どうしても故郷を取り戻すことを祖父に語る自分がいます。

先が見えない不安な日々が３年目に入り、苦しいけど生きるしかない、そんな時の昭和22年の秋、９月の末頃だと思いますが、突然ソ連軍から日本人は日本に帰すとの命令が出ました。「１週間以内に船が来る、荷物は持っただけ」そんな命令で我々島民は島を追い出され、子供心にもこんな事がと思い悔しかった。

人間扱いされない方法で船に乗せられ、１万トン位はあるらしい船は、もうすでに択捉島、国後島の島民でいっぱいでした。船底に作られた仮居住区はぎゅうぎゅう詰めで、換気が悪いのか異臭がする中、船は樺太へ向かうとのことでした。甲板上には仮設トイレがありましたが、運悪く航海中から海は大荒れ、甲板のトイレも破損し汚水が居住区へと。

ようやく４、５日後に樺太の港に着きました。港から数キロ離れた収容所は、真岡小学校と女学校でした。私達はこの後想像も出来ない様な生活、死と隣り合わせ、死と同居しているようでした。

樺太の10月はもう厳寒です。そして食べ物不足、劣悪な栄養、女子トイレの板も剥がされ丸見え、とても明るい時間には使えない、そんな悪環境が２週間も続いた後、体を壊し死亡する人も出てきて、薬もない医者もいない、年老いた人や小さい子供が倒れていく、そんな日々でした。

日本からの引き揚げ船は４～５隻ピストン輸送しているらしいが、いつその船に乗れるのか誰も判らない、毎日毎日お互いに励まし合うのが何よりも力になった。女学校の収容所に移らなければ、引き揚げ船には乗れないことが判ったが、私達色丹島組はまだ女学校に移る様子はありませんでした。

この収容所からだいぶ人が移動して行き、11月に入った頃ようやく第二収容所の女学校に移動出来ましたが、収容所の生活は益々ひどくなりました。死亡する人、大人も多くなり皆焦りと不安の気持ちをどうすることも出来ないでいる中、２週間を過ぎた頃とうとう引き揚げ船に乗る時がきました。嬉しくて嬉しくて、家族７人生きて無事帰れることが何よりでした。

「高倉山丸」私達が乗った引き揚げ船の中で、安堵と嬉しさのあまり涙を流す人も多かった。樺太での死と背中合わせの日々をどうにか乗り切り、函館の特設桟橋へ着きました。子供の私でも口で言えないような特別な感情が体の中を駆ったことを今でも覚えています。

でも、桟橋の待合室で突然我が家族に悲劇が起きていたのです。姉の長女（２歳）が母親の背中で亡くなっていたのです。姉は家族にも知らせずどうしても日本に連れて帰る、その一念で頑張ってきたそうです。姉は島を出る２ヶ月前に１歳の長男を病で失い、２～３ヶ月で二人の子供を死なせてしまった姉の心情を思うと、悲しく悔しかった。島を追われた元島民には、辛く悲しいことが随分多くあるのです。思い出すのが辛いのです。

今、元島民は半分以上も亡くなり平均年齢は76歳です。後継者に語り続けることが北方領土問題を風化させないと考えています。

島を追われ、生活苦に喘ぎながら返還運動に邁進しました元島民は、返還運動の中で大きな役割を果たし、北方領土返還運動の原点の地、根室から発信された声は全国の運動になりました。全国の運動者の皆さんに深く敬意と感謝をしているところです。

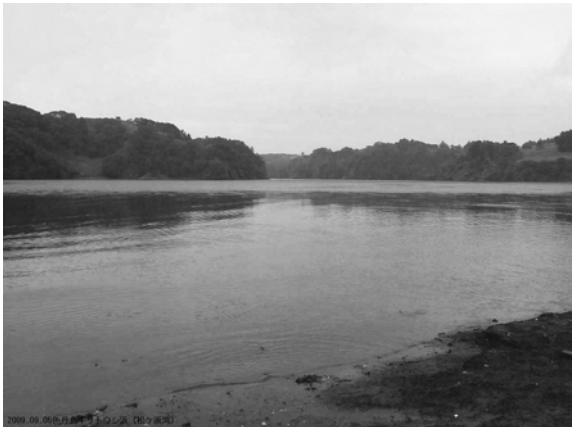
私達は戦後はまだ終わってはいないとよく言います。ここにも戦争の大きな傷跡が癒えることなく戦後は終わっていません。共に、この大きな問題を風化させることなく、後継者に引き継いでもらう為の最大の努力をしていこうではありませんか。

本日は、北方領土の話を聞いて頂き心から感謝を申し上げます。これからも県民皆様の返還運動への深いご理解とご支援を心からお願い申し上げ、そして県民皆様のご多幸を心からご祈念申し上げ話を終わります。

有り難うございました。

追　加

私達元島民は、元島民でなければ出来ない様々な方法や手法で、今故郷へ帰れる三つのチャンネルの中で、今住んでいる島民に正しい島の歴史を訴え、元島民、２世、３世には我々の先人が血と汗の中で開拓した故郷への思いを伝えることが、これからの返還運動に大きな役割を果たしてくれるものと信じています。



元島民の訴え



北方領土の早期返還を求めて

吉　田　義　久さん

私はただ今ご紹介いただきました、元北方領土島民の吉田です。このたび山梨県連合婦人会より「北方領土を語る会」にお招きいただき誠にありがとうございます。何分にもお話しする事が大変不慣れですので、大変聞き苦しい点も多々ございましょうが、何卒お許しを頂きしばらくお話しさせていただきます。

私達元北方領土島民は先の戦争に敗れ、終戦後不法にもソ連軍に占拠上陸され強制的に北方の島々より引き揚げさせられ本土へ帰りました。

私は昭和12年８月、北海道根室半島ノサップ岬よりわずか７キロメートル先に浮かぶ水晶島で生まれました。私の故郷は北方領土水晶島なのです。生まれて以来昭和20年８月末まで住んでいました。

終戦当時、私はまだ９才でしたので、島での生活につきましてははっきりとは覚えていませんが、断片的に記憶している部分と合わせ、今は亡き両親から聞いた話などを交えて当時の記憶を呼び起こしながらお話し致します。

先ず、北方領土とは皆さんもご存知のとおり歯舞諸島、色丹島、国後島、択捉島の四島からなる島々なのです。この北方の島々は日本固有の領土で、私達の祖父母や父母が明治初期より北海道下場所と言われ根室地方に出稼ぎして、そこを基地に北方の島々に渡り苦労に苦労を重ねて開拓し、世界三大漁場と云われるまでに発展しました。タラ、カニ、ニシン、昆布など豊富な水産資源に恵まれて豊かな生活を送る事ができました。私達元島民にとりましては、それぞれの島にそれぞれ想い出が戦後60余年経過した現在でも、胸の奥深くにくっきりと焼きついているのです。

私の住んでいた水晶島は、冬ともなれば一面雪と氷に覆われる厳しい季節もありますが、四季を通じて美しい自然がありました。

私の家族は、この島で昆布採集漁業を主に沿岸漁業を営んで生活基盤を築きました。開拓当時は粗末な家屋で、風雪が丸太小屋へ吹き込み、ムシロを吊して雨露をしのいだそうでしたが、大正、昭和に入り島の生活も次第に安定し、住宅や作業場も建て替えられ、漁船も新しく造り替えられ、さてこれから事業を拡大しようと思っていた矢先、第二次世界大戦の末期にかかり日本の敗戦色が色濃くなり、予想もしなかったソ連軍の参戦により決定的終戦となりました。

終戦を迎えホッとしていたところ、ソ連軍が日本固有の領土である北方の島々へ終戦後の８月26日から９月５日にかけて不法に侵入、侵攻して来たのです。長年私達の祖父母が血と汗で築いた全財産をすべて残し、私にとりましては故郷が一夜にして奪われ島を離れました。

島での生活は決して楽な生活でも、楽しい日々でもありませんでした。私も子供心に記憶がありますが、当時昆布を干す浜を開墾する手伝いをして、手足がハマナスのトゲで血を噴き出した事もありました。ただこの北方の島々では、体さえ丈夫であれば海岸に流れ着く昆布を拾っていても生活ができました。

春、５月ともなれば島の高台は一面緑の草原に変わり、６月に入るとハマナス、エゾカ

ンゾウ、クロユリ、タンポポ、アヤメ、スズランなど春の草花が一斉に咲き乱れます。この頃になりますと昆布漁も最盛期に入り、私達子供も一緒になって昆布干しに加わり、浜は大変賑わいました。この様に記憶をたどってお話し致しますと、懐かしい故郷がありありと瞼に映り話はつきません。

去る平成13年、私は戦後初めて自分の故郷の水晶島を訪ねる事ができ、大変感動いたしました。島は優しく私たちを受け入れ、昔と変わらず美しい草花が咲いていました。当時残してきた建物や生活の跡は全然ありませんでした。長い歳月が跡を消したのでしょう。

我々元島民は、北方の島々を偲び強制引き揚げ以来65年、故郷の復帰を願い返還運動に力を尽くして今日に至っていますこの間にも、多くの元島民が島の帰りを願いながらこの世を去って行かれました。

私達元島民は、先人の血と汗で開拓した北方領土が一日も早く返還される事を願い、粘り強く叫び続けます。

本日会場に来られている皆様一人一人に故郷があります。私にもこの北方領土水晶島が故郷なのです。今日は山梨県連合婦人会にお招きいただき、私の熱い望郷の想いを語らせていただき本当にありがとうございました。ご参集の皆様のご支援を戴き、今後も返還運動を続けて参りたいと思います。

最後に、本日お集まりの皆様並びに山梨県連合婦人会の益々の発展とご多幸をご祈念申し上げ、講話を終えさせていただきます。

本当にありがとうございました。



北方領土返還要求運動

北方領土返還運動について

社団法人北方領土復帰期成同盟　参与　**山　崎　　隆**

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の山崎でございます。

本日は、山梨県連合婦人会様のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」がこのように多くの皆様のご参加を得て開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしなどを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

折角の機会ですので、貴重な時間をお借りして、北方同盟が進めております「北方領土返還要求運動」と最近の北方領土問題につきまして、ご紹介をさせて頂きます。

お手元にお配りしております、「北方同盟の組織と事業の概要」を、ご覧いただきたい

と思います。

はじめに、「北方同盟」についてですが、１ページ目をお開き下さい。

見開きの右下に、北方同盟の沿革が書いてあります。北方同盟は、北方領土返還要求運動を主たる目的とした、外務大臣許可の公益法人でございます。

さて、北方領土でございますが、お手元の「語る会のパンフレット」の裏表紙をご覧下さい。

ここに、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島は、大きな島です。それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、４島合わせて5,036平方キロメートルもあります。

数字を聞いても大きさが解りにくいと思いますが、山梨県の面積が約4,465平方キロメートルですから、択捉島と国後島を合わせると香川県と大体同じ程度の面積となります。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年８月下旬から９月上旬にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長安藤石典（あんどういしすけ）氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件が続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

以来、64年に亘り、私たち国民が一丸となって返還要求運動を推進し、政府においては、「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年からは首脳レベルを含む会談が頻繁に行われるようになりました。

昨年７月に北海道で開催された「北海道洞爺湖サミット」の際の日露首脳会談では、**「戦略的に重要な隣国である両国間に平和条約が存在しないことは、幅広い分野における日露関係の進展にとり支障になっていること」「平和条約については、日露間の領土問題を最終的に解決するものでなければならないこと。」**などの共通認識が確認され、11月にペルーのリマで行われたAPEC首脳会議の祭の日露首脳会談では、**「来年予定される一連の首脳レベルの会談を念頭に、今後必要となる作業に言及した上で、具体的な作業に入るよう、事務方に指示をおろす」**ことで一致しました。

また、今年２月のサハリンにおける日露首脳会談では、**「この問題を我々の世代で解決すること」「これまでに達成された諸合意及び諸文書に基づいて作業を行うこと」「メドベェージェフ大統領が指示を出した、新たな、独創的で、型にはまらないアプローチの下で作業を行うこと。」「帰属の問題、即ち、国境の画定の最終的な解決につながるよう作業を加速すべく追加的な指示を出すこと」**で両首脳が一致を見ました。

さらには、先月５月12日に来日したプーチン首相との会談において、プーチン首相も北方領土問題について「ロシア国内にはこの問題を解決しないままでこのまま進もうとする考えもあるが、自分はそうは思わない。」との発言があり**「メドベェージェフ大統領は７月のイタリアでのサミットの際の日露首脳会談で北方領土問題について詳しく話す用意がある」**との説明がありました。

しかしながら、皆様ご承知のとおり７月に開催されたイタリア・ラクイラサミットの際の首脳会談において北方領土問題の前進はなく、従来の基本方針の確認に留まりました。

しかし、北方同盟としましては、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

また他方で、最近の北方領土について、皆さんもニュースなどでご覧になっていることと思いますけれども、人道支援物資供与の中止、第１回目のビザなし訪問の中止などがありました。いわゆる出入国カード問題です。

この問題については、今年のビザなし第１陣の訪問前に解決されましたが、ロシア側の国内での手続きが間に合わず、残念ながら５月15日出発予定の第１回目は中止となってしまいました。しかし、翌週22日からの第２回目からは従来通りの手続きで無事に訪問を終えました。

ここで、少しビザなし交流についてご説明したいと思います。このビザなし交流は、平成３年４月、当時のゴルバチョフソ連大統領が来日した際、ソ連側より**「日本国民と北方四島在住ソ連人との交流の拡大、日本国民による北方四島の簡素化された無査証の枠組みの設定」**が提案されました。

その後、日本とソ連のとの合意により、「領土問題を含む日ソ間の平和条約が締結されるまでの間、相互理解の増進を図り、もってそのような問題の解決に寄与することを目的として日本国民と北方四島在住ソ連人との相互訪問を旅券・査証なしで行うこと」などを内容とする新しい枠組みとして、いわゆる「ビザなし交流」が作られました。

このようにビザなし交流は、北方領土問題解決のための環境整備という重要な事業であり、またビザなし訪問の他に北方領土墓参、元島民の方々のふるさと訪問である自由訪問などは、限られた機会にしか四島に帰ることの出来ない元島民の方々の貴重な訪問です。

これら北方四島への訪問事業が、これからも円滑に進むことを強く願っております。

では続いて、北方同盟の主な事業をご紹介したいと思います。

今一度お手元の、「組織と事業概要」４ページを開いていただきたいと思います。

Ⅰ世論の結集と啓発活動、Ⅱ返還要求運動推進活動、Ⅲ後継者育成活動の三つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、Ⅲ後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて64年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継でいくことが大切です。

それでは、後継者育成事業についてお話をさせて頂きます。１つ目は、「北方領土問題教育研究セミナー」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に、教育セミナーを開催することとしております。

２つ目は、「第24回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に３つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学５年生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校５年生全員に配付しております。

最後に４つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

なお、このパンフレットの裏表紙に北方同盟のアドレスを記載いたしておりますので、是非、皆様方にホームページをご覧頂ければと思います。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで下さい。何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

【北海道会場】

●開催日時　　平成21年11月19日㈭　　11時20分～12時20分
●開催場所　　札幌市かでる２・７
●開催団体　　北海道女性団体連絡協議会
●参 加 者　　50名

元島民の訴え



北方領土の早期返還を求めて

三　上　洋　一さん

ご紹介いただきました元択捉島民の三上洋一でございます。私の故郷・北方領土について、皆様にお話する機会を得ましたことを大変有り難く思っております。特に会場が「かでる２．７」と聞いたとき、嬉しくなってしまいました。島では子供の頃、「かでて！」といって遊びの仲間入りをしました。それに２月７日は「北方領土の日」です。深読みすれば、「道民活動センター・かでる２・７（北２条西７丁目）」は「北方領土の日に仲間入りさせるセンター」とも読めるのです。元島民が北方領土を語るのにこれほどふさわしい場所はありません。

まず、お手元に「講演レジメ」と「関連する国際法の条文などを記した資料」、それから外務省の冊子「われらの北方領土」の３つが配布されているか、お確かめ願います。

レジメや資料にも記しましたが、北方領土問題は未解決のまま64年経過し、この間に国内では四島一括返還から二島返還論まで、様々な議論が出ています。そこで北方領土問題とは何なのか、国際法と元島民の立場から見た北方領土問題の発端と本質、返還への道筋についてお話してみたいと思います。

一方、戦前、北方四島はどんな所で人々がどのように暮らしていた島々だったのかは、意外に知られていません。四島の地理・歴史・産業・物流・生活をお伝えします。さらに、四島へのソ連軍の上陸と不法占拠、ソ連人と２年間の混住、元島民の本土への強制送還の実態、ビザなし交流の意義、ロシア本土への発信など、時間の許す限り、体験をまじえてお伝えします。

北方領土問題は未解決のまま戦後64年、ベルリンの壁崩壊後にソ連がロシアとなってほぼ20年近く経過しましたが、隣国であるロシアとは平和条約が締結されていませんので、国際法上は戦争状態が終結しておりません。これは、法と正義に基づいて解決されなければならないというところまでは、日ソ首脳会談でも一致しております。

ではまずソ連・ロシアによる北方領土不法占拠の歴史を振り返ってみたいと思います。1941年に日本艦隊が択捉島・単冠湾（ひとかっぷわん）からハワイの真珠湾に向けて出撃し、太平洋戦争が始まりました。その結果、1945年に日本はポツダム宣言を受諾して終戦を迎えますが、その文書類（「ポツダム宣言」、「カイロ宣言」、「大

西洋憲章」）の中には、遡って1914年（第一次世界大戦開戦時）における国境は変更されないことが記されております。従って、一度も他国の領土になったことのない北方四島は、国際法上、正当な日本の領土です。その四島をソ連ついでロシアが不法占拠し続けているのです。

まず、ソ連が不法を働いたのは、領土の不法占拠だけではありませんでした。最初の占領の仕方が国際条約違反でした。

北方領土問題は資料にも記した安藤石典（あんどういしすけ）・根室町長のマッカーサー元帥への請願に始まるといわれていますが、請願書の中で、「ソ連は保障占領にあらずして軍時占領をなし」とはっきりとそのことを述べております。

保障占領は停戦や終戦時に行われる占領で、特に戦後占領は平和条約締結に至る道筋を保障するための占領ですから、交戦時の占領のように本土との交通・通信を遮断してはならず、敗戦国の復興に役立つ施策が行われなければならないのです。

私たち元島民は、戦後２年間、実体的に戦時占領の状態で、本土との交通・通信を遮断され、ソ連人と混住状態にありました。しかし、1947年になって突然、ソ連のスターリンが「日本人は帰れ！島に住みたかったらロシア人になれ」と言いました。日本人で在り続けるためには強制送還の船に乗る以外、道はありませんでした。事実上の強制退去であります。

第２次世界大戦後、国が東西あるいは南北に分断された例はありますが、交戦のない占領の状態で、ある地域から住民を根こそぎ退去させた例は、北方領土をおいて他にありません。これは資料にある1907年のハーグ陸戦条約、1949年のジュネーブ第四条約の文民保護の条項に照らして明らかに違法であります。ソ連は国際法に違反して難民を生じさせたのです。

ハーグ陸戦条約は戦争のルールを定めた条約として有名です。特に捕虜を粗末に扱ってはならないことが記されています。ソ連はこれに違反して、日本兵をシベリヤに抑留し、強制労働で数万人を死亡させました。北方領土でも、敵国の領土における軍の権力に関する規制は全て破られました。ハーグ陸戦条約第45条・宣誓（敵国への忠誠の禁止）に照らして、ソ連人になれなどと言ってはならないのです。

四島島民の強制送還は1948年に終わっていますので、1949年成立のジュネーブ第４条約はすれ違いですが、移送・立ち退きの規制は今や時代の精神です。これに関して、外務省は北方領土返還後も、現島民であるロシア人の居住の意志は尊重すると述べています。

私は2006年にビザなし交流で、2007年には自由訪問の団長として生まれ育った留別村を訪ねました。村は廃村になり、自然に還っておりました。このように、四島の日本人の村で今もロシア人が住み続けているのは半分にも満たないのです。歯舞諸島には民間人は住んでおりません。私たちの帰りを待っている土地があるのです。

ここまでの話を一度まとめますと、日本は戦争に負けたのだから、連合国側に廻ったソ連が進駐してくるのまでは、不本意ながら認めよう。しかし、通信・交通を遮断して条約の締結なしに勝手に住民を追い出し、一方的に国境線を引くのは国際法に反しますよ。現に空いている土地があるのだから住民を元に戻し、戦後占領の状態からやり直し、平和条約を締結して国境線を確定するという、通常の国際ルールに則った道筋を辿るべきだ、という主張です。

元島民の平均年齢は76歳を越えました。この戦後占領状態再現の主張はここ数年が、最後で最大のチャンスだと思っております。人が住んでこそ領土、日本人が住んでこそ日本の領土、という大原則を実現するために、皆様のご理解と力強いご支援をお願いいたします。

では北方四島の歴史と地理と産業について

話を進めることにしましょう。まず復習から。外務省の冊子「われらの北方領土」資料編４～５頁にある四島の地図をご覧ください。

四島は択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島からなっています。総面積は5,036平方キロメートルですから、千葉県、愛知県、福岡県などとほぼ同じです。終戦時の定住人口は17,291人ですから、いかに過疎の地であったかお分かりでしょう。

色丹島と歯舞群島の地形は、根室半島に似てなだらかな丘陵です。逆に、択捉島と国後島は知床半島にそっくりで、1,200から1,500メートル級の高い山々が連なり、その山がいきなり深い海に没しており、山の途切れた平地は湿原や湖沼となり、数多い河川の河口付近に砂浜があります。村落は河口の平地や高台に作られました。

付近の海は世界３大漁場の一つに数えられ、鮭、鱒、鱈、蟹、昆布、帆立貝、海苔、鯨など水産資源が豊富で、他に馬を中心とする牧畜業、林業などが主な産業でした。

しかし、暖流と寒流がぶつかり、それ故によい漁場なのですが、濃霧の発生があり、海難事故の多い地域でもありました。冬には流氷がやってきて湾は一面の氷で閉ざされます。

私の生まれ育った択捉島は四島の面積の55％を占め、鳥取県とほぼ同じ大きさの島ですが、太平洋岸にある単冠湾（ひとかっぷわん）だけは不凍港でした。

1941年11月26日にこの湾から日本の艦隊30数隻が発進し、12月８日にハワイの真珠湾を攻撃しました。太平洋戦争の始まりです。何故、最北の島から南のハワイに向かったかと不思議にお思いでしょうが、地球儀をみれば直ぐ分かります。択捉島は日本の最も東の島でもあり、更に東にあるハワイへは最短距離の島なのです。この出撃が発端となって、やがて北方四島の現在の状況を生み出すことになりました。

歴史を遡ると、1700年代後半、幕府は北方四島の経営に乗り出しています。国後・択捉島を中心に、最上徳内、近藤重蔵（択捉島に大日本恵土呂府の碑を建立）、高田屋嘉兵衛のような勇敢な日本人が活躍しました。同時にロシア人の南下も始まり、両者は接触して紛争も生じました。

そこで、これまでの歴史的事実と当時の実情を踏まえて、1855年（安政元年）２月７日、日魯通好条約が伊豆の下田で結ばれました。この条約で国境は択捉島と得撫（ウルップ）島の間に引かれ、択捉・国後・色丹・歯舞諸島は日本領土、樺太は両国民混住の地と決められました。これを記念して２月７日は北方領土の日と定められています。

1945年８月15日の終戦後、８月28～９月２日にソ連が不法占拠して以来、北方四島はソ連ついでロシアが実効支配していますが、日本政府は「択捉島より南は日魯通好条約で日本領であることをロシアが認めており、その後の領土の変遷でも一度も外国領になったことがないのだから、日本固有の領土である」と一貫して主張しています。

江戸時代後半には北方四島に既に場所請負人制度がありました。場所とは漁業権のことで、定置網や地引き網と干場（かんば）の権利です。干場とは昆布や海苔を干したり、船を揚げたり、網を干したりする浜辺の使用権です。江戸時代末期、択捉島には大小141の漁業権が設定されていたと言われます。

明治時代になって、四島に日本人がどのようにして住み着いて行ったか、わが家の例でお話ししましょう。

明治の初め曾祖父は神戸でラッコやテンの毛皮を英国に輸出していましたが、乱獲で次第に入手困難になり、タラバ蟹缶詰の輸出を思い立って北洋の基地・函館に事務所を開きました。次いで蟹の漁業権を択捉島の太平洋岸に、さらに鮭鱒の漁業権をオホーツク海側に得て、缶詰工場を建てました。しかし、最初の数年、長く厳しい冬の間は函館で暮らしていました。

やがて、郵便局の権利を買い逓送業を始め、配達には馬が必要だったので、牧畜業を始めこれを契機に島に定住しました。この権利は黒猫ヤマトの業務の地域独占権といった風のもので、馬は現在の車に相当します。ですから、郵政事業は民間活用で始まったんです。

当時、北海道と四島を結ぶ定期便は月２回だけですので、長逗留のお客さんのために、村には不釣り合いな大きな旅館がありましたが、時と共に船便も増え、旅館は網元の定住の家屋などとして買い取られていきました。わが家もそうしたものの一つでした。

網元は漁業権者で、寝泊まりをする番屋、船、網倉、塩倉、加工場、缶詰工場、燻製工場などを持っていましたが、定住人口では漁業を行うのに不足でした。ですから、夏は「船頭」に率いられた網衆（漁業季節労務者）で島の人口は膨れ上がりました。船頭は酒造りにおける杜氏のように、漁業におけるマイスターであり、秋田県、青森県、北海道などからやってきました。網元は船頭に契約金を払い、次の間付きの特別室を与えて厚遇しました。網衆の賃金は、大部分が歩合制であり漁獲量を競って日の出とともに漁に出ていました。鮭、鱒漁は定置網と地引き網が主でした。

漁獲の大部分は塩蔵され、一部は沖に待つ日魯漁業などの冷凍船へ生のまま売られました。「筋子おど」は東北弁で、鮭・鱒の塩蔵のマイスターの呼称であり、彼等が働き手を連れてきて、塩の管理と技術指導をしていました。

このように、島の漁業は「船頭」を中心とする漁業集団と「筋子おど」を頂点とする加工集団に支えられていました。漁業シーズンに四島にやってくるこれらの季節労務者は約6,000人であり、ほぼ島民の労働力に匹敵するものでした。

タラバ蟹と鮭の缶詰は輸出産業で、このことは根室女工節にも歌われていますが、戦争で輸出先を失い、急速に衰えました。

生産物は船でまず根室と函館に運ばれました。昭和15年の記録では、北海道庁が補助金を出す命令航路が年間214航海、民間の自由航路308航海、合計522航海が行われています。実に多量の産物と人が行き交っていたことが分かります。

鮭・鱒の取引は、島民が内地と呼ぶ北海道の根室や函館にある自分たちの事務所を通じても行われましたが、大手漁業会社への直接販売も多かったのです。会社の冷凍船は塩蔵用の塩や網だけではなく、米、味噌、石油をはじめ色々な物資を運んで来たので、何かと便利でした。そんな訳で、戦時中の物資の乏しい時代でも、どの家庭も３年分くらいの食料は備蓄しておりました。備蓄は決戦に備えた軍の指導でもありました。

村の大きな商店と定住者の間では、「付け」で売買が行われ、年２度の決裁が普通でした。母が算数の勉強に役立つのではないかと考え、お小遣いをくれたことがありましたが、「付けで良いんですよ」と受け取ってもらえず、がっかりしたのを覚えています。

ちょっと洒落た物はカタログ通信販売で取り寄せていました。母は三越や主婦の友社のものがお気に入りでした。月刊誌、おもちゃ、衣類、キューピーマヨネーズなど、定期便の入る日の郵便局は、待ち焦がれた小包の到着を待つ人で賑わっていました。船が来ない隣村へは、局員が郵袋を馬に付けて配達しました。しばしば熊も出る道でした。

開戦後しばらく、島では平時と同じく漁業と日常の生活が続いていました。しかし、一時増強された守備隊も昭和19年からは、逆に南方戦線や本土決戦に備えて引き抜かれていきました。昭和20年には、雪解けと共に全軍が転出し、新たに札幌で編成された師団が四島の防衛に当たることとなりました。小川中将以下の司令部は太平洋側の単冠湾に面した天寧村に設けられました。

このような軍の動きは、子供の私にも感じ取れました。わが家と郵便局には、よく将校

が訪れ重要事件の際には郵便局の当直室に寝泊まりしました。郵便局は、軍にとって重要な通信網の一部になっていたのです。

島の郵便局は、今の都会の郵便局とはおよそかけ離れたイメージのものです。本土との電話回線は国後島を経由する一本で、電話は各村の郵便局にしかなく、モールス信号による電信も主要な業務でした。紗那(しゃな)郵便局には唯一大きな無線塔があり、本土と定時連絡を取っていました。

また、島内の郵便物を逓送するために馬が常用されていました。配達員は、冬期以外は熊除けの鈴を付けた馬にまたがり、山野の道を駆けます。それに加え、一般島民や旅人の交通の便のために、官営の駅逓所近くでは馬が放牧され、旅人はお金を払いさえすれば、馬を勝手に捕まえて利用することが出来ました。馬が現在のレンタカーだったのです。

昭和17年７月には、留別湾で船が魚雷で沈没し、乗客120余名が海中に投げ出されました。米国軍艦は、陸に向かって艦砲射撃を始め私達は山陰に避難しました。その後も近海や湾に米戦艦が何度か出没しました。

８月15日、重大な放送があるらしいと父はラジオを整備し、近所の人達と一緒に玉音放送を聞きました。雑音が多く、私には何のことかよく判らなかったのですが、父が深刻な顔で「米国軍が上陸して来るかもしれないな」と言いました。

昭和20年８月28日、留別村一帯は濃い霧に包まれていました。午前10時過ぎ、ソ連のウクライナ軍、約500人が霧に乗じて上陸し、村を包囲しました。一隊は、村を見下ろす「風見の山」に陣取りました。次いで、橋を渡って村に入り、まず郵便局を襲い、みな外に追い出されました。私の父、三上一郎局長ら２人は村役場にソ連軍の侵攻を伝え、他の局員は村人に戸締まりを促して歩きました。米軍でなくソ連軍であることに村人はひどく驚きました。

三上局長は、今日の濃霧は留別湾に限ったものであり、上陸はここだけだろうと判断しました。そして、この意外なソ連軍の上陸・侵攻状況を是非とも本土と軍の本部がある天獺(てんねい)村に知らせなければならない、それが自分の責務であると思ったのですが、村内で唯一交信手段がある郵便局に戻る事が出来ません。そこで若い局員１人を連れて、30Km 離れた無線設備のある紗那(しゃな)村の郵便局に向かいました。途中、歩哨線を抜け、山の上の放牧場で馬に馬具を着けたとき、馬が嘶いたためにソ連兵に発見され銃撃されましたが、幸い弾は当たらず、無事に紗那郵便局に到着しました。川口無線士は「28日午前10時、ソ連軍留別に上陸。郵便局は占拠され云々」と託された電文を逓信局長宛に打電しました。ソ連軍の上陸は、こうして本土と島内の日本軍の司令部に伝えられました。

この日、島民に死傷者はなく、５日後に小川師団長は武器解除の協定を結び、兵器の引渡しを終えました。ソ連軍はこの後、９月１日に国後島と色丹島、３日に歯舞群島に上陸しました。島民はソ連軍の監視下に置かれ、本土との連絡は絶たれました。

村の周りには歩哨線が張られました。ソ連兵は丘の上から双眼鏡で村の様子を探り、私たちも窓のカーテンの陰から双眼鏡で彼等を観察しました。兵達はひどく怯えているように見えました。村の若い女性は難を逃れるため、髪を切り男装しました。

数日が何事もなく過ぎ、その後もソ連軍の軍紀は保たれ大きなトラブルは生じませんでした。ソ連軍（ウクライナ軍）を率いるアキモフ大佐が、ドイツとの戦闘で家族が村を焼かれた苦労人であったことも幸いしました。

ソ連軍はモスクワ大学日本語科卒の通訳・ニコライを連れてきました。彼を通じて村の主だった建物の接収が次々と進められました。まず最初に３軒の大きな民家が接収され、司令部と営倉と事務所になりました。国民学校の体育館は軍隊用に改装されました。

大叔父（父の叔父）の旅館も接収され最初

は軍の事務所になり、やがてロシア人の学校になりました。大叔父一家は客を装った日本兵らを匿っていましたが、接収と同時に私たちと住み25人の大家族になりました。その中には軍医（内科、外科、歯科）、大学助教授、農学士など、平時の千島では考えられない知識人がいました。家財も馬も牛もこれまでの生活も奪われ、労役に駆り出され、つらい忍従の日々が始まりましたが、一方で私たちはこんな素晴らしい人たちにも巡り会ったのです。語学に秀でた渡辺軍医は短期間にロシア語をマスターしてしまいました。以後、村に起こった多くの難事件が、この人達をブレーンにして解決されていったのです。

ある日、授業がロシア語で行われ、日本語は習えなくなる。教科書もロシア人学校と同じになるという噂が流れ、村中が動揺しました。それは私達は本土に帰れず、永久にソ連人にされてしまうことを意味しているかも知れなかったからです。張間校長が訪ねてきて父と渡辺先生と相談し、密かに法蔵寺と千光寺の住職を先生とする寺子屋学習を企画する一方、司令部の少佐と交渉を続けました。一月ほどして、授業は今まで通り、ただし課外にロシア語を習うことが決定しました。

日本軍は９月半ばからシベリアへ送られました。ソ連軍の詮索は厳しく、せっかく匿った軍医らも翌年７月には樺太に連れ去られてしまいました。

９月末頃からソ連兵が増え、一緒に民間人も多数移住してきました。多民族で中にはロシア語を話せない人達もいました。初め日本人は無償で強制労働に狩りだされましたが、12月から民警所によって職を決められ、給料も支払われ、麦粉も配給されるようになりました。

わが家は旅館を買い取ったものだったので広く、仕切ってドアを付け、棟割り長屋のようにして、ソ連将校３家族が同じ屋根の下に住むことになりました。知識人に対する見張りであったかも知れません。ロシア語も覚え、ソ連人が家に遊びにくるようになりました。人情味があり人なつっこい人達でした。世話好きな母や大叔母が夫婦喧嘩の仲裁を頼まれたりするほど、付き合いは進んだのです。

村を取り囲むように歩哨線が張られていましたが、ソ連人の子供と一緒だとほとんどフリーパスでした。私達は海軍大尉の息子イワンらと仲良しになり、自由に山野を歩き回りました。鮭鱒を獲ることは禁止されていましたが、子供が獲る分は大目にみられました。そんな訳で子供達は山菜や魚の調達に大活躍したのです。

1947年夏、突然スターリンの命令で、「日本人は帰れ、島にいたかったらソ連人になれ」と言われました。日本人で在り続けるためには、強制送還の船に乗る以外道はありませんでした。救急食と寝具と少しの着替えの他は持つ事を許されませんでした。

送還船へは、艀（はしけ）から網袋に入れられ、ウインチでまるで荷物のように貨物船の船底へ降ろされました。私達は甲板にはい上がり群がるように立って、村の方を見ていました。

やがて陽は沈み、見送りのソ連人達が闇の中に燃やす焚き火だけがたった一つの陸の目印になりました。船が動き出しました。

「ああ、これが千島の見納めか。俺が兄さんを慕って、この島に渡ったのは、たった16の時だったが」と大叔父が言いました。

「叔父さん、幸い家族は皆無事だ。何もないところから漁場も旅館も築きあげれたんだもの、生きてればまた、いい夢もあるさ」と、父が言いました。

「ああ、俺があと20若かったらなあ。……」剛毅な大叔父の目から大粒の涙がこぼれ落ちました。

不意に焚火の火が潤んだように大きくなったかと思うと、ふっと水平線の陰に消えました。それが故郷の見納めでした。

翌日、船は国後島の沖を通り北へ北へと進みました。本土に向かっていない事を知って、一時、船内が騒然となりました。途中、海が

時化て老人と赤児が何人か亡くなり、水葬にされました。３日後、船は樺太の不凍港である真岡に着きました。私達は、丘の中腹にある収容所に入れられ、空腹と寒さの日々を送りました。２週間ほど経って、厳しい検査で、身につけていた金品を公然と、半ば事務的に剥奪された後、第２収容所で船待ちをしました。数日して、船尾に日章旗を掲げて迎えの船が来ました。父が「あれが函館山だぞ」と指差して、函館港に入っていった日のことを今も忘れません。

2006年８月にビザなし交流に参加し、国後島と択捉島を訪問することができました。特に印象深かったのは、８月28日午前に行われた、択捉島紗那（しゃな）での対話集会と午後の故郷・留別村訪問です。

今回の対話集会ではビザなし交流の15年をどう評価するかが主なテーマでした。友好的な雰囲気のうちに日ロの対話が進み、予定時間を30分も延長するほどでした。日ロ双方から、領土問題の解決に当たっては、混住（日ロ双方の島民が一緒に住む）を検討すべきだとの提言がありました。私は混住は単なる願望ではなく、1945年～47年において、択捉島では現実であったことを報告し、上に述べたような家族間つきあい、子供同士がよく一緒に遊んだ様子を話しました。

1996年つまり十年前に参加したビザなし交流では考えられなかった光景であり、そこに15年間積み上げられてきたものの重みを感じた瞬間でした。だが、「混住」は政治的解決なしには実現しない。関係者の一致した意見としてそれぞれの政府に要請行動を起こそうではないかとの提案がなされました。

領土問題の存在すら知らなかったロシア人住民にその存在を知らしめ、このような提案がなされるに至ったビザなし交流15年の歩みは、大いに評価されるべきです。

８月28日はソ連軍上陸の日であるので、午後、訪問団はマスコミ中心に歴史班を組織し、12名が車で留別村へ向かいました。私は元村民として、案内役を務めました。私にとって、59年振りの故郷です。奇しくも、父たちが61年前の同じ日にソ連軍の上陸を本土へ伝えるために命がけで馬を駆った道筋を、逆方向から辿ることになりました。

胸は、懐かしさと期待で一杯であった。しかし、村を一望できる「風見の山」に立った時、何一つ人が住んだ気配がなく、自然の姿に変貌した村跡の様子に声もでませんでした。留別村のランドマークであった通称「砂山小学校」の丘は平坦な土地となり、ハマナスや雑草に覆われています。墓地の谷は砂に埋まって跡形もありません。既に訪れた墓参団が建立してあった墓標に線香をあげ、お参りをしました。村跡を歩くと、不思議なことに何もないためか、かえって昔の情景が寄り添うように脳裏に湧き上がってきました。

実は翌2007年７月９～10日、自由訪問の団長として生まれ故郷の択捉島留別村を再訪することができました。国後水道を過ぎてからは、61年前に強制送還された航跡を逆に辿って、その無念さを噛みしめつつ、留別湾に入りました。投錨して艀（はしけ）に乗り換え、水先案内人を務めて村の砂浜に上陸しました。

すっかり自然に還ってしまった村跡を見て、私は前回とは違う感想を持ちました。「嘆いてばかりはいられない、明治の初めに、曾祖父や祖父が最初に見た村の風景はこれだったんだ。そこから始めて、家や番屋を建て、神社・学校・寺と村を作っていった。廃村になった場所は多い。私たちには帰ってくる土地があるのだ」と思いました。

ここでちょうど、最初の国際法関連の終わりのところに話題が戻ってきました。話の全体を纏めてみようと思います。

長期にわたるビザなし交流によって、多数の人間が相互訪問し、ロシアの現島民は日本とロシアの間に領土問題が存在することを知るようになりました。また、北海道を中心とした医療行為や災難時の支援によって信頼されているのも事実です。

しかし、今後の課題は、北方領土のロシア人の間に、日本に対する近親感は高まっているものの、領土返還については反対の声が強まりつつある現実をどう打開するかでしょう。その背景に、ロシア政府が新クリル計画という北方領土の大規模開発計画を打ち出し、800億円を越える予算を注ぎ込んで、ロシア人の定着と定住の既成事実化を図っている現実があります。

最終的領土交渉は政府官邸・首相とクレムリン・大統領が行うものであり、辺境にある現地だけでなく、ロシア本土の世論に訴える必要があります。それにはインターネット、短波ラジオ、そしてロシアのマスコミなどを利用する必要があります。そのようなことは可能でしょうか。

2007年６月末に、私は外務省から元島民としてロシアのパブリコワ記者に１時間ほど取材を受けるように依頼されました。７月４日ロシア紙「ガゼータ」(日本の朝日新聞に相当)に６段抜きで「元択捉島民の思い」が掲載されたと、北海道新聞ロシア支局から連絡があり、７月５日の北海道新聞に紹介されました。

モスクワでもこのようなアピールの仕方が可能なのだと初めて気付きました。今後、ロシア本土への情報発信を心がけていきたいと勉強と準備を進めています。もちろん政府・外務省も大いに情報発信に本腰を入れるべきでしょう。

外交交渉とともにロシアとの交流や情報発信、国内の返還運動も同時に強めていかなければ、領土問題の進展は難しいのです。

そして、外交問題は詰まるところ国内問題とも言われます。国民の理解と後押しなしには交渉の進展はあり得ません。皆様をはじめ、できるだけ多くの方々が、北方領土問題に関心を持ち、後押しして下さることをお願いいたします。



【香川県会場】

●開催日時　　平成22年１月26日㈫　　13時00分～15時00分
●開催場所　　香川県社会福祉総合センター
●開催団体　　香川県婦人団体連絡協議会
●参 加 者　　200名

元島民の訴え



北方領土の早期返還を求めて

河　田　弘登志 さん

ただ今、ご紹介をいただきました河田でございます。出身は北方領土歯舞群島の多楽島でございますが、今は北方領土が間近に見える北海道の根室市に住んでおります。

この度は「元島民の北方領土を語る会」にお招きを頂きありがとうございました。毎年全国各地から北方領土現地視察や関係行事等で大勢の方々が根室市においでいただいておりますが、その時お会いした方や、ご指導頂いた方が本日お集まりの皆様の中にもいらっしゃるのではないかと思います。

香川県と北方領土の関係について少し触れてみたいと思います。明治の前期に香川県から約2,000人の方が北海道に移住して開拓に貢献されております。また戦前戦後を通じて北洋漁業の開発にも多大な尽力をされております。

今から200年以上前（1806年、文化３年）淡路島出身で漁場請負人の高田屋嘉兵衛が根室に金刀比羅神社を創祀し、金刀比羅大神を奉斎したと言われており、北方領土の島々にも金刀比羅神社がありました。海の神様としての香川県の金刀比羅宮を通して深い関係にあったものだと思います。

北方領土または北方四島ともいいますが、北海道の根室半島に連なる歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島で面積約5,000平方キロメートルの中で漁業、水産業を中心に17,291人が住んでいたことはご存知のことと思いますが、実は歯舞群島には水晶島、秋勇留等、勇留島、志発島、多楽島と人の住んでいた五つの島があることを知らない方が随分多い様に思います。

特に歯舞群島の周辺は昆布の宝庫で、北方四島の30パーセントの約5,300人が生活しておりました。

私の生まれ育った島、多楽島は歯舞群島の最東端で納沙布岬から約45キロメートル離れた所にある面積12平方キロメートルの平らで小さな島ですが、当時231世帯1,457人が住んでいた人口密度の一番高い島でした。

北方領土は私達の祖先が３代５代にわたって雑草を一本一本手で引き抜き、まさに血と汗で開拓した土地であります。私も島で生まれ11歳まで住んでおりました。

島の周辺は昆布の宝庫で質量共に大変良く、主産業は漁業でしたが特に昆布採取が盛んで、漁の始まる春の５月から半年間は非常

に忙しくなり、朝早くから夕方遅くまで大人も子供も一家総出で寝る暇もないくらい一生懸命働きました。

このように厳しい生活の中にあっても、島中が一つの家族のように助け合いながら戦時中とは言っても皆が仲良く和やかに暮らしておりました。

ところが昭和20年８月15日、敗戦という日本人にとって忘れられない日を迎えました。敗戦のショックからなんとか気を取り直して生産に励もうとしていた矢先の８月28日から９月５日の間に北方領土はソ連軍に不法占拠されてしまったのです。

多楽島に当時駐屯していた日本軍の田中中隊長によると、９月４日この日はちょうど軍人勅諭奉載日で、海岸近くの広場に整列して最後の勅諭奉読式と同時に兵器返還式を執行していた時だったそうです。

まさかソ連軍が上陸してくるとは思っていなかった島民は皆びっくりしました。納沙布岬からわずか3.7キロメートルしか離れていない貝殻島まで不法占拠してしまったのです。

２、３人が一組になって一軒一軒土足で上がり込んできたソ連兵は、アメリカはいないか、兵隊を匿っていないか、銃を隠していないか等と言いながら銃で天井を突いて家捜ししました。また、トッキートッキー（腕時計）サッキーサッキー（酒）と言って腕時計や酒などを欲しがりました。

若い女性などは何をされるか判らないということで、変装して納屋とか物置とか山の中などに隠しました。

ソ連軍は島の中心地の古別に進駐して、学校や無線局等公共施設は全部占拠してしまい頼りにしていた日本の兵隊さん達は間もなく何処かに連行されて行きました。後で聞いたことですが、シベリアに何年も抑留されていたそうです。

無線も切られ本土との通信も全く途絶え、ただ飛び交うのは不穏なデマばかり、他の島では村の責任者が銃殺されたところもあります。私の島でも銃殺寸前ということがありました。９月といえば漁期の真っ最中で、私も父と夜「いか釣り」漁に出て発砲されたことがあります。

毎日毎日銃口を突きつけられての生活、そして通信は途絶え夜間の外出も出来なくなり島民は次第に不安と恐怖が募り、やむなく夜陰に乗じて身の回りの物を少々持って小船で脱出するようになりました。

通常ですと５～６時間で楽に根室港に着くことができるのですが、最短距離を通りますと途中の島にもソ連軍がおりますから、発見されないように大きく迂回するわけです。また、陸からエンジンをかけますと島中に鳴り響きますから、音の聞こえなくなるずっと沖合まで手漕ぎで出たのです。ですから通常の２倍も３倍も時間が掛かったわけです。

凪の良い時を見計らって出港するのですが、これだけ時間がかかりますと秋の海のことです途中で時化に遭い、水舟になって目的地以外の海岸に漂流し、命からがら地元の人に助けられた人もたくさんおります。65年たった今もまだ着いていない人がおります。これらの人達がどの様になったかということはお分かり頂けると思います。

私は学校にも行けず友達もいなくなった島で、遊び相手になってくれたアレキセと呼んでいたソ連の将校にある日学校に行きたいということを話しました。彼は11年間学校に行ったと言い、子供は勉強をしなければいけないと言って北海道に行くことを許可してくれたのです。

昭和20年11月末、たまたま島に来ていた親戚の船で２歳下の弟と二人で島をでることになりました。その時、彼アレキセは「学校が終わったらまた島に帰ってこいよ」と言って、学校から新しい机を２個持ってきて北海道に行っても机が無いと思うからこれを使いなさいと言って見送ってくれました。

もちろん新築したばかりの家もあり、両親

や弟妹達もいるわけですから、学校が終わったらすぐ帰ってくるよと約束したのですがついに帰ることが出来ず、両親や弟妹達と再会したのがそれから２年以上後の雪もちらつく頃でした。

先ほどもお話したように、北方四島には当時17,291人の人が住んでおりましたが、その内の約半分は一時避難的に島を脱出したのです。そして残った約半分は昭和22年から23年にかけて強制送還させられたのです。島に残って住むのであればソ連人として帰化して残るか、そうでなければ強制送還ということで二者択一を迫られたわけです。

私の家族も昭和22年９月６日の夕方に突然帰国命令（強制送還）が出て、１時間以内に大急ぎで身支度をして船に乗り込んだそうです。そして隣の志発島に約40日間収容され、またソ連の大きな貨物船に大きな網目のモッコで貨物同然の扱いで積み込まれたそうです。

数時間後には根室の港に着くものと思っていたそうですが、なかなか着かないので父は甲板に出て星を見たところ、船は北へ北へと走っており着いた所は樺太の真岡港（ホルムスク）だったそうです。ところが先に送還されてきた人が大勢いて、収容する場所が無かったのか暫く上陸することが出来ず港を出たり入ったりしながら、トイレも満足に付いていない貨物船の船倉の中で１週間もぎゅうぎゅう詰めにされ、誠に汚い話ですが甲板の上で用を足したそうでしたが、それが波をかぶると諸共頭からかぶったということです。

樺太ではかつての女学校を座ってようやく入れる位の腰の高さに１坪位に仕切り、ムシロを敷いただけの所に６、７人も入れられ１ヶ月も日本からの引き揚げ船を待ったそうです。

食事は黒パン１切れ位と大豆の入った薄いスープ位で空腹と寒さをしのぐのに大変で、誰もが栄養失調になり随分と多くの老人や子供が日本の土を踏むことなく死んでいったそうですが、ただ穴を掘って凍った死体を転がしてあるだけで一握りの土もかけてあげることができなかったと、平成13年に88歳で亡くなった母が何時も悔やんでおりました。

我が家を出てから根室に着くまでの３ヶ月余りの長旅で、食べる物も着る物もなく、着の身着のまま裸一貫とはまさにあの時のことを言うのだと思います。本当に見るも哀れな姿でした。元島民は決して島を捨ててきたのではありません。

当時の根室は、戦後のちょうど１ヶ月前の７月14日から15日に空襲をうけ、街の中心部の８割が焼け野原となり、罹災を受けた町民でさえ住む家もなく、まだ煙の立ち込めている中に島を追われた多くの人が住みついたのです。物置や馬小屋、防空壕の中等とにかく雨梅雨しのげる所であれば、どんな所にでも身を寄せ合いながら厳しい冬を過ごし、１日も早く島に帰れる日を待ち続けてきました。しかしそれから60余年過ぎた今日未だ帰ることが出来ないのです。

生きているうちにもう一度島の土を踏みたい、せめて先祖のお墓参りだけでもしたいという願いも果たせぬまま半数以上が亡くなりました。残った約半数の平均年齢も76歳を超えました。私のように当時小学生だった者がもうこの歳であります。島での生活や当時の状況を記憶し、語り伝えることができる最後の年代になってしまいました。

元島民が島に行ける方法として１つは北方領土墓参であります。昭和39年から平成21年まで32年実施し、52ヵ所墓地全部を墓参することができました（昭和43年、46年から48年、51年から60年、14年中止）。私は平成７年８月、遺族の一員として50年振りに生まれ育った島の墓参に参加し、父と祖父が昭和22年９月に強制送還される間際に散乱していたたくさんの遺骨を埋葬してきた場所も確認し、お参りしてきました。

２つ目は平成11年に始まった自由訪問であります。これまでに11年実施され、私も平成

14年多楽島に行き57年振りに自分の住んでいた所を散策しましたが、新築したばかりの家が跡形もなく、土台石すら見つからずがっかりしました。特に島の南側の海岸線が100メートル位浸食され、あまりの変貌にびっくりしました。

３つ目は平成４年から始まった北方四島交流であります。これは元島民等と現在住んでいるロシア人がビザを持たないで交流し、お互いに理解を深め合い北方領土問題に寄与することでこれまで18年実施しました。私も平成６年に参加して国後島と択捉島に行ってきました。

この３事業合わせて元島民等の参加数は延べ約6,100人ですが、島の土を再び踏むことができた元島民の実数は半数に満たないのではないでかと思います。

今更申し上げるまでもなく、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方四島は歴史的にも国際法上から見ても紛れもなく日本固有の領土であります。面積の大小、資源の有る無しだけではなく国家の主権と尊厳に関わる問題であります。

また北方領土問題は元島民や一地域一部の人々だけの問題ではなく、１億３千万全国民一人一人の問題であります。今年で北方領土がソ連、ロシアに不法占拠されてから65年になります。

昭和20年８月15日（1954年）終戦、その１ヶ月前に根室は空襲で中心部80パーセントを焼失しました。罹災者の援護や脱出してきた島民の受入に不眠不休で当たった混乱の中で、当時の安藤石典（あんどういしすけ）根室町長が昭和20年12月１日、連合国軍司令官マッカーサ元帥に対して「北方領土を米軍の保障占領下において欲しい」と陳情、返還要求運動の狼煙をあげてから65年になります。

しかし全国民の問題、国民運動と言いながら北方領土問題に関心がない、知らないと言う人がまだまだ多いのではないかと思います。皆さんご承知の２月７日を「北方領土の日」（昭和56年）と定めてから今年で30回目になりますが、これすら知らないと言う人がたくさんおります。また、北方領土の正確な位置を知らない人が全国で35パーセントもいるそうです。誠に残念なことであります。

これはやはり次代を担う青少年が、学校教育の中でしっかりと領土問題を学習できるようにしなければならないと思います。小中、高校、大学と一貫した領土教育、そして公民館など社会教育の中でも取り上げて頂くことが必要だと思います。

そして高校入試、大学入試、就職試験等には必ず北方領土問題を取り入れて頂きたい。特に官公庁等は率先して実施して頂きたいと思います。領土問題を勉強しなければならないという環境を作ることも必要ではないかと思います。

百聞は一見にしかずと申します。根室の納沙布岬からわずか3.7キロ沖合の貝殻島までロシアに不法占拠されているという現実を、一人でも多くの方に見ていただきたいと思います。

17,291人いた元島民も既に55パーセントが亡くなりました。残った45パーセントも平均年齢が76歳をこえました。私たちはこれまで一貫して北方四島の一括返還を基本方針として運動して参りました。今後ともこの基本方針を堅持して粘り強く運動を続けて参りたいと思います。そして今のうちに、一人でも多くの人に当時の島の様子などを語り継いで行きたいと思っております。



私が生まれ育った小さな島、多楽島のことを中心にお話しをさせていただきましたが、何か一つでも参考になれば大変有り難いと思います。

結びに、香川県婦人団体連絡協議会の益々のご発展と、本日お集まりの皆様のご健勝ご活躍を心から祈念申し上げまして終わらせていただきます。

ご静聴ありがとうございました。

元島民二世の訴え



北方領土の早期返還を求めて

木　村　吉　伸 さん

皆さん、こんにちは。本日はお忙しい中お集まりをいただきまして誠にありがとうございました。そしてまた日頃から北方領土問題へのご理解とご協力を賜り本当にありがとうございます。

さてさて、私はこんな格好（着物・袴）をしておりますが、実は三遊亭金八という落語家なんでございます。

そして父が北方領土、歯舞群島の島の一つ志発島の出身で、私が元島民２世ということになります。

まあ、日頃「木村吉伸さん」と言われるのは区役所か病院くらいのものなので、かといって学校の授業じゃありませんので、面白くもない話をくどくど申しあげても仕方がないので、今日は「元島民２世の落語家」三遊亭金八として私の思いをおしゃべりさせていただきます。

それに今、落語家も数が多いですからね。真打だけでも私の所属する落語協会に180人いますから。ちなみに私はその中でも一番のイケメンと言われてます。ホントよ。あっ、私のイケメンと言うのは「池袋に住んでるメンズ」ということですから。イケメンの元島民２世の落語家と覚えておいて下さい。

今日は時間が押してまして、手短にフレーズをドンと申しますと、私が皆さんに訴えたいことは、北方領土、私の場合は父が住んでいた、父は今も根室で健在ですが志発島というものが私三遊亭金八にとって「アイデンティティ」ということです。

僕がこの世に誕生してくる間に親また、そしてその親というのが必ず居る訳で、その流れが志発島という島にあったということです。だってそうでしょ。実際そこで平和に暮らしていたんですから。ところが戦争で引揚げて来て、その「アイデンティティ」が分断されてしまったわけですね。

今日現在、島に自由に渡ることは出来ないのですから「分断」というより「凍結」だね。凍結。素朴な生理的快・不快として、自分を表す物が不安定だったりしたら嫌でしょう。違います？「奥さんお名前は」「田中花子です」。これ確固たる物ですよ。「お住まいどちら」「兵庫町です」これも現在進行形の確固たる「アイデンティティ」ですよ。「あなたは何て落語家さん」「えっ、三遊亭金八かもしれないし、髙松亭栗林っていうこともあるらしいんです。」って、これじゃあ信用されませんよ。何だそれって。

今、私は着物「紋付」を着てますが、この紋「丸に梅鉢」なんですけど、我々落語家は二ツ目になると紋付を作るんですが、その時父に聞きまして「うちの紋は何」「いやあ知

らない」、「知らないって、何で」「いや別に使うこともなかったし、写真かなんかは２・３枚しかないから着物なんか映ってないし、第一引揚げて来る時全部米に換えたりして無くなった」って。

まあそんな物を必要としなかったというのは、ある意味幸せかもしれませんが、自分を表すシンボル的な物が存在しないというより、歴史の波に翻弄されて失われてしまったというのが何とも頼りなくって。色々調べまして、どうも祖先は明治の頃、青森の津軽、お岩木山の麓あたりから島へ来たらしいと。そして数代遡って別れた親類がいると。それで紋も「丸に梅鉢」があるということで、今回これを紋に決めて初めて作った新しい紋付なのです。

その「アイデンティティ」、自分が存在する迄の歴史の通過点を確固たる物にしたい。それが本日皆様に理解していただきたいという事であります。理論や理屈というよりも感情的な部分ですね。

よく「北方領土なんか返って来る訳はないよ。だってさ」と我が物顔で、のたまうお人によく出会います。では「島はロシアのものになって良いですか？」と言いたいですね。それにそういうお方の御宅宣というのは確かに正論なのかも知れませんが、実際元島民の父を持ち、北方領土を間近に望む根室市を故郷に持った自分としては何か「ヒトゴト」のように感じるのです。確かにその学者先生にとっては北方領土は「ヒトゴト」ですよ、立派な。でも自分は理論ではなく元島民の皆さんのハートの部分、感情の部分、そんなものを訴え、そして今日お集まりの皆様に少しでも心に留めておいていただければという気持ちで一杯です。

（この後、自由訪問で行った志発島から拾って来た品物を出し種々解説）

●帆　立　貝～間違いなく戦前、日本人が剥いた物。貝殻に日付、父、自分の名前を書き自宅のあった場所に記念として置いてきた。

●ビ ー ル 瓶～「大日本麦酒」の名入り。島の土がついている。やはり日本人が住んでいたことにほかならない。

●ボルト(ワッシャー付)～船のエンジンだろうか、父は引揚げて来る時、畑に船のエンジンを埋めて来たとの話が聞けた。

ちょっと時間も余りありませんので、ともかく私の元島民２世としての思いは一旦結びにさせていただきます。ご静聴誠にありがとうございました。

それでは、本日、私は落語家、芸人でございまして、折角ですので何か自分なりにスキルを使って、この領土問題を訴えることは出来ないものかという訳で、今日はどうしても皆様方に領土問題についてお話がしたい！という元島民の女性「林ヨネ」さんがいらっしゃってますので、早速お呼びしましょう。林ヨネさんお願いいたします。

（腹話術人形支度して取り出す）
（拍手大喝采!!）

三遊亭金八：さあ皆さんにご紹介します。北方領土元島民の林ヨネさんです。
林　　ヨネ：今日はお忙しい中ありがとうございます。といって本当に忙しけりゃ来ないでしょうが。
三遊亭金八：変なこと言わないように。今日は地方の婦人団体、日頃から領土問題に組織を挙げて取り組んで下さっている皆様が大勢お集

まりですよ。
林　　ヨネ：そうなんですってねぇ。じゃ、どんな方が来ているか。ちょっとチェックしてみようかねぇ。
三遊亭金八：まあ、そりゃいいですね。では客席チェックスタート!!
（一わたり客席を見渡す）
林　　ヨネ：ひぇぇっ!!
三遊亭金八：どうしました。急に大きな声。
林　　ヨネ：驚きました。本当に今日大丈夫でしょうか。
三遊亭金八：だって客席をチェックしたでしょう。何かありました。
林　　ヨネ：ええ。ほとんど後期高齢者の方ばかり。
三遊亭金八：失礼なこと言っちゃいけません。
林　　ヨネ：いえいえ、とにかく本日お集まりの皆様方は品があります。
三遊亭金八：はあはあ、なるほど品がある。
林　　ヨネ：そして相（そう）がある。
三遊亭金八：品があって相がある。貧相って、そりゃいけません。それはそうと、ヨネさんは一言訴えたいことがあるんでは。
林　　ヨネ：聞いていただけますか。
三遊亭金八：どうぞどうぞ。
林　　ヨネ：出演料はいくらですか。
三遊亭金八：いやらしいこと言わないで。ではどうぞ。
林　　ヨネ：ええ、本日はご多用中にもかかわらず、かくも盛大にご参集賜りまして、厚くお礼申しあげます。また日頃より当会の活動にご理解とご協力をいただき誠にありがとうございます。
三遊亭金八：固い、固い、挨拶が。
林　　ヨネ：私のふるさとは北方領土なのです。そのふるさとが戦争によってロシアに占拠され、未だに自由に行く事も出来ません。ある日突然ロシアの兵隊さんがやって来まして。最後には大変な苦労をして北海道に引揚げて来て64年。昔は村で一番美人と言われてましたが、今じゃこんなにシワだらけになっちゃいました。ちなみに金八さんシワっていくつあるかご存知？
三遊亭金八：えっ、いくつです？
林　　ヨネ：シワ、シワ32。
三遊亭金八：掛け算じゃないんですか？
林　　ヨネ：とにかく北方領土は日本の領土です。一日も早く解決して、私は自分の生まれた地、ふるさとを再びこの足で踏みたいです。皆様にも高松から北方領土までは遠いですが少しでも興味を持っていただき、こういう人間や問題が存在することを認識していただき、来る選挙には清き一票をよろしくお願いいたします。
三遊亭金八：何ですか!!選挙じゃないんだから。
林　　ヨネ：さあさあ、金八さん時間なんだって。帰りに今日の晩のオカズを買う方もいらっしゃるでしょうから。
三遊亭金八：そうですね。それでは今日の林さんの話をうけて歌います。

三遊亭金八・林ヨネさんとデュエット（会場を歩きながら）

（歌）：「椰子の実」

名も知らぬ　遠き島より
流れ寄る　椰子の実一つ
故郷の岸を　離れて
汝（なれ）はそも　波に幾月
実を取りて　胸にあつれば

新(あらた)なり　流離(りゅうり)の憂い
思いやる　八重の汐々(しおじお)
いずれの日にか　国に帰らん

雨に風に　つけても
思い出ずる　故郷

（大拍手、アンコールあって）

三遊亭金八：ではもう一曲二人で会場の皆さんもご一緒に「ふるさと」を歌います。

（歌）：兎追いし　かの山
小鮒釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて
忘れがたき　故郷

如何に在ます　父母
恙なしや　友がき

三遊亭金八：どうもありがとうございました。
林　　ヨネ：さよなら。



北方領土返還要求運動

北方領土返還運動について

社団法人北方領土復帰期成同盟　参与　**山　崎　　隆**

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の山崎でございます。

本日は、香川県婦人団体連絡協議会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」がこのように多くの皆様のご参加を得て開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしなどを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

折角の機会ですので、貴重な時間をお借りして、北方同盟が進めております「北方領土返還要求運動」と最近の北方領土問題につきまして、ご紹介をさせて頂きます。

お手元にお配りしております、「北方同盟の組織と事業の概要」を、ご覧いただきたいと思います。

はじめに、「北方同盟」についてですが、１ページ目をお開き下さい。

見開きの右下に、北方同盟の沿革が書いてあります。北方同盟は、北方領土返還要求運動を主たる目的とした、外務大臣許可の公益法人でございます。

さて、北方領土でございますが、お手元の「語る会のパンフレット」の裏表紙をご覧下さい。

ここに、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島は、大きな島です。それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、４島合わせて5,036平方キロメートルもあります。

数字を聞いても大きさが解りにくいと思いますが、香川県の面積が約1,876平方キロメートルですから、国後、色丹、歯舞群島を合わせると香川県と同じ程度の面積となります。また、択捉島は、香川県の1.7倍の大きさになります。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年８月下旬から９月上旬にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長安藤石典（あんどういしすけ）氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件が続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年の政権交代以降、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われるようになりました。

北方同盟としましても、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

では、北方同盟の主な事業をご紹介したいと思います。

今一度、お手元の「組織と事業概要」４ページを開いていただきたいと思います。

Ⅰ世論の結集と啓発活動、Ⅱ返還要求運動推進活動、Ⅲ後継者育成活動の三つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、Ⅲ後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて64年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継でいくことが大切です。

後継者育成事業についての取り組みの１つ目は、「北方領土問題教育研究セミナー」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に、教育セミナーを開催することとしております。

２つ目は、「第24回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に３つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学５年生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深

めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校５年生全員に配付しております。

最後に４つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

なお、このパンフレットの裏表紙に北方同盟のアドレスを記載いたしておりますので、是非、皆様方にホームページをご覧頂ければと思います。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで下さい。何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

【大分県会場】

●開催日時　平成22年２月９日㈫　10時40分～12時00分
●開催場所　別府市中央公民館
●開催団体　大分県地域婦人団体連合会
●参 加 者　400名

元島民の訴え



北方領土の早期返還を求めて

児　玉　泰　子さん

私は、1944年歯舞群島の志発島で生まれました。故郷の志発島は、納沙布岬から約23キロ先にあります。島は山がなく平坦な大地です。戦前、島民は東側と西側に別れ生活しておりました。

私の家は東側､昆布漁を営んでおりました。春から秋までの漁期には夜明け前に起き、早朝から日が沈むまで休む暇を惜しみ、家族全員で働いておりました。冬季は、漁網の整備や翌年の漁具の準備をします。

生活物資は根室から船で運んでおりました。島は、豊かな海の恵みを受け、島民全体が一つの家族のように助け合い、平和でのどかな日々を送っておりました。

しかし、1945年９月、島はソ連軍に占領され、ソ連軍の管理下におかれた島民の生活は一変し、根室との連絡も遮断されました。ソ連軍の監視下での生活が始まりました。1947年11月、強制送還の船で故郷の島を離れる事になりました。当時３歳でした。従って島の記憶は全くありませんが、家族や島民の方々から島の話を沢山聞いて育ちました｡私は｢自分は生きているうちに必ず故郷に帰る。そして家族全員で再び暮らす。｣その一念で北方領土の返還要求運動に43年間拘わって参りました。

今日は｢必ず島に帰るんだ｡島は良かった。｣と望郷の念を抱き、亡くなった家族や同胞の想い、そして自分が体験したこと等を交え、１・北方領土の概要と自然　２・開拓と戦前の様子　３・占領から強制送還　４・強制送還と脱島　５・元島民の故郷への想いなどをお話しいたします。

①　北方四島の概要と自然

戦前、北方四島には17,291人が定住しておりましたが、春から秋の漁期には、大勢の出稼ぎ労働者が入り、人口は膨れ上がり漁業基地として大きな生産を挙げておりました。

北方領土の面積・歴史・条約などは、先ほど事務局の方が説明されましたが、面積に関して分かりやすく話します。国後島は、沖縄本島より少し大きく､択捉島はその２倍です。北方四島を、歯舞・色丹・国後・択捉と呼びますが、歯舞と言う名の島はありません。正式には歯舞群島です。命名の由来は、根室から納沙布岬に行く途中16キロの所に歯舞村の本村がありました。群島はこの村の行政区域

だったのです。現在、歯舞は本村と群島が寸断されているのです。

周辺の海は水産物の宝庫。戦前の主な生産品は、歯舞群島は昆布、色丹は鯨・鱈など、国後は蟹缶、択捉は鮭鱒の塩蔵でした。その他、何れの島でも、干鱈・ホタテの貝柱・海苔・小型魚種等も生産しておりました。

それでは個々の島々に関してもう少しお話しいたします。歯舞群島は、どの島も起伏がなく平坦で一面草原に覆われています。周辺の海は岩礁が多く、良質の昆布の宝庫です。従って、昆布を餌にするウニ・蟹・貝類などの甲殻類やこれら甲殻類を餌とするアザラシやラッコなどの海獣類も多く生息しています。

昆布漁が主体、生産された昆布は国内は元より上海などに輸出されておりました。他に、帆立貝の缶詰なども生産しておりました。また、島内の草原を利用し馬の飼育も行われていました。特に軍馬の生産地でした。水は豊かで飲料水には恵まれておりました。婦人会の皆さんには、歯舞産の昆布は馴染みの品と思います。

色丹島の産業は、捕鯨が主体で東洋一の捕鯨基地だったと聞いております。島はとっても綺麗です。緩やかな稜線と緑の濃淡が美しく自然の箱庭、独特の風景です。特に太平洋側の海岸線の松と岩礁のコントラスは見事です。この島にのみ自生する高山植物が多く生息、高山植物の宝庫です。

国後島の周辺海域は、タラバガニや帆立貝の宝庫で主な産業は蟹缶詰の生産でした。世界で初めてタラバガニの缶詰生産を行ったのが国後島だとも言われております。生産された蟹缶詰は横浜から海外に輸出されておりました。

東方には、北方四島で一番高い「爺爺岳」が聳(そび)えます。オホーツク海岸には海底火山で出来た見事な柱状節理「材木岩」があります。そのほか、良質な温泉も湧き自然溢れる島です。

択捉島は雄大です。島内は大小200本の川が流れています。この川に秋になると大量の鮭・鱒が遡上します。

島内の自然は正に絶景です。山・山また山、大小の無数の山が幾重にも連なり、雄大な景観は圧巻、他に類を見ないほどで自然の宝島、山と水の島です。山から流れる川と湧き水は大湿原を作ります。どこまでも続く草原は広大な原生花園、次々に可憐な花を咲かせます。大小200本の川は陸の栄養を蓄えミネラルをたっぷり含んで海に流れ、周辺の海域を豊にします。海草が育ち甲殻類のゆり籠、ラッコなどの成育に最適です。

延々と続く白い砂浜やリアス式海岸。島の東方にある「ラッキベツ滝」は落差141m、水量も多く圧巻です。勿論、温泉が湧き出ております。

北方四島の海域は、オキアミからシャチまでが生息する正に豊饒の海です。また絶滅危惧種の海鳥、エトピリカ・ケイマフリ・ウミガラスなどの海鳥が生息し、陸にもホテイアツモリソウ、その他の絶滅危惧種の高山植物が多く自生する自然の楽園です。

ロシア政府は、現在島々の開発に着手しました。この豊かな自然が壊されつつあります。そして、魚類の乱獲が続き、甲殻類が極端に減少しています。甲殻類が無くなるとラッコなどが生息できなくなります。自然環境が崩れつつあります。

②　開拓と戦前の様子

北方領土の本格開拓は江戸時代です。私の先祖は岩手県から船を調達し、島に渡っております。島の開墾は大変だったそうです。昆布の乾場を作ることから始まりました。草原を掘り起こし、砂と石を入れ、土をかけてしっかり固めます。その時、中心を少し高めに少し傾斜が付くようにします。これが完成しましたら、基盤目の溝を掘ります。更に、石を敷きその上に砂を敷きます。昆布生産の対敵は雨水です。干場作りに手間を掛けるのは雨

水のはけを良くするためです。正に父祖が血と汗で築いた土地です。海の恵みと大地の実りに恵まれ、島民全員が大きな家族のように助け合い生活しておりました。

私は、７年前やっと生まれた家の跡に立つことが出来ました。見渡す限り、背丈まで伸びた草で覆われていました。「やっと来た」草をかき分け夢中で進みました。目印は何もありませんでした。限られた時間の中で何かを探さなければ、汗だくで動き焦るばかりでした。やっと草の中に祖父が使っていた手水鉢を見つけました。触るのも恐れボーッと立ちつくしました。気を取り直して一帯をゆっくり歩くと、足の感覚が変わりました。硬いのです。ここだけ背丈の低い草が茂っています。先祖が丹精込めて作った昆布の干場でした。目頭が熱くなり故郷が涙で霞みました。

③　四島の占領～強制送還

島は戦争の直接被害を受けずに生活していました。戦争との関わりは、軍人さんの駐屯と軍馬の生産。更に昆布を焼いて煮詰め「塩化カリ」を作り、軍に納めていました。これは火薬の原料になったそうです。

村の青年が多く出兵し、私の叔父も出兵しておりました。父は昆布漁の他に馬の飼育に長けていたので軍から軍馬の種馬を預かり、軍馬の生産にも携わっていました。

1945年７月、根室がアメリカの艦砲射撃で街の７割が焼け野原になりました。根室を焼けつくす火は空を真っ赤に染め、志発島からも見えました。根室が焼けている、親戚が多いので島民の不安が募りました。戦争はどうなるのだろうか。

1945年８月15日、村人はラジオから流れる天皇陛下の声を聞いたそうです。私の家族はこれからどうなるのかと不安を抱きながらも、それまでどおりの生活を続けたそうです。

終戦の知らせを受け、アメリカ兵が来るのではと思っていました。しかし、９月２日、私の島にソ連兵が上陸して来ました。駐屯していた日本の兵隊さんはシベリアに送られ、日本軍の施設はソ連軍が利用しました。

島の占領は、初めに８月28日早朝、択捉島の留別村にソ連軍が海から上陸してきました。この日は、よく言う一寸先も見えないような海霧に包まれ、島民はソ連兵の上陸に気づきませんでした。日が昇り、霧が薄くなると島民の目の前に銃をかまえたソ連兵が立っていたのです。役場、学校、警察、郵便局など主要な施設はソ連兵に押さえられました。そして、国後、色丹、歯舞群島の島々が次々と占領され９月５日までに全ての島が占領されました。島民は本土との連絡も途絶え、ソ連の監視下で不安な生活が始まりました。

島にソ連軍が上陸した。知らせを受けた我が家は、母と乳飲み子の私を屋根裏に隠したそうです。銃を抱え、土足で家に上がって来ました。どうなるのだろう恐怖が募りました。

日々が経過する中で、何日か置きに見回りに来るソ連兵のパターンが分かりました。そして、ソ連軍が島を巡回するには馬が必要です。良い馬が居る我が家に立ち寄り、馬を調達します。

母は、毎日屋根裏に隠れているわけには行かないので、居間に降りていました。その時、ソ連の将校が家に上がってきました。将校が身振り手振りで私を抱かせて欲しいと要求していることが分かったそうです。恐る恐る私を渡したそうです。将校は上手に私をあやし、自分にも同じ位の子供が居ると身振りで伝えたそうです。母は、親として子供を思う心はロシア人も同じだと思うと、恐怖心は消えたそうです。島を離れるまでの二年間、将校は私のことを自分の子供のように可愛がってくれたそうです。

しかし、人々の生活は常にソ連軍の監視の下、根室との連絡は途絶え自由を奪われ、漁師の父も土木作業に借り出されるなど一変しました。怖くて脱島する人も出て来ました。

こうした中、一般のロシア人が島に入って来ました。ロシア人は着の身着のまま、麻袋

にフライパン一つ程度の荷物でした。住む家もなく、ロシア人は脱島した日本人の家に住みました。学校は二つに分けて使用しました。こうして文化や風習、更にモラルの異なりからトラブルも発生しましたが、ロシア人と日本人が助け合いながらの共同生活が始まりました。日本人だから、日本の領土だから島に留まったのです。

④　強制送還と脱島

言葉も風習も異なり、銃を抱え土足で家に入るソ連兵に対する恐怖は募り、特に年頃の娘さんがいる家族は不安だらけでした。年頃の女性は髪を切り、男性用の服を身につけ、胸にさらしを巻き、あぐらをかいて座るようにしました。家族は娘の身を案じ、脱島を決意しました。国後島のある家族です。18歳の娘さんがいました。ある日、親から島を出る事にした。何時でも出れるように準備して置くようにと言われたそうです。その夜は島を離れると思うと寂しくて涙が流れたそうです。脱出する日はソ連兵の監視が怠る、海が荒れている日か濃い霧の日です。ある嵐の夜、寝付いたらお父さんに島を出ると起こされたそうです。その時にお母さんから、万が一の時にはこれを飲むのよと言われ毒入りの団子が入った小さな袋を渡されました。袋は着物の内襟に縫い付けました。恐ろしくて叫びたくなり足が震えました。船は島を離れ、根室に向かいましたが嵐で航行不能になり、国後の浜辺で休む事にしました。暗闇の中大波に襲われながらもどうにか浜辺に上陸し、時化が収まるのを待ちました。夜が明け辺りが見えてきました。目に飛び込んできたのは浜辺に打ち上げられている死体でした。先に脱出した知人です。嵐で遭難したのです。自分もこうなるのではと恐ろしくてたまらなかったそうです。やっと嵐が収まり再び船に乗りました。ずっと船倉に身を屈めていました。何時間か経った時、お父さんの「もう出て来て良いぞ」と声が聞こえてきました。甲板に出ると根室の街並みが見えました。お母さんと抱き合い、互いに毒入りの饅頭の袋を襟から取り合いました。彼女はそれから故郷の国後が見える根室で生活しています。故郷には帰りたいが、あの脱出した時の恐怖が蘇り、海峡を渡ることは出来ないと話しております。

1947年７月から送還が始まりました。僅かな荷物を持ち、島からソ連の貨物船に乗せられ樺太の真岡に収容されました。そして日本の船で函館に送られた。送還は1947年５回。1948年２回です。計７回です。最後の送還は1948年10月でした。島民は島に留まりたかったです。島に留まるとソ連の国籍に入れられるのです。日本人として生きていくためには止むを得ず島を離れるしかなかったのです。しかも一時的な引揚げと思っていました。

私の家族は1947年11月、送還されることになりました。島を離れる前に家財道具を整理しました。「必ず島に帰れる」から、家財道具の一部は軒下に穴を掘り埋めました。持ち出せる重さが決められました。ソ連の将校が来て「今、日本は食糧が不足している。食料と衣類を持ったほうが良い」とアドバイスしてくれたそうです。手荷物を造りました。私は３歳になっていました。妹は１歳と３ヶ月ヨチヨチ歩きです。11人の家族は、指定された浜辺に向かいました。島民が集まっておりました。炎天下の中で長時間立たされ、一人一人確認され、やっと小船に乗り沖合いに停泊しているソ連の貨物船に向かいました。貨物船は高いので乗り移ることが出来ません。

私たちは、荷物の上げ下ろしに使用する大きな網袋に詰め込まれました。荷物同様の扱いにされ、網袋に入れられた私たちは10m ほど吊り上げられました。袋が大揺れします。下は海です。恐怖で泣き出す者、念仏を唱える者、生きた心地がせず声も出せない状態でした。

貨物船は他の島を回り、同様に日本人を収容しました。初冬の北の海は荒れ狂い、船の

波間に漂い、船酔いや嘔吐などで悪臭が漂い、船倉も甲板も人で大混乱でした。トイレの数も不足、船倉に入れられた年配者や幼児は急な梯子を登れません。止むを得ず空いた容器に用を足します。甲板にいる人は甲板の端で用を足しました。時化の海水が甲板を襲い、この嘔吐物や汚物を含んだ海水が船倉に落ちてきます。頭から汚物を含んだ海水をかぶるのです。体力のない老人や幼児が亡くなると、病気が発生するので海に捨てました。向かったのは樺太の真岡でした。樺太の大地はもう凍り始め、収容所に向かいました。収容所は丘の上にありました。小雨が降り寒さが襲ってきました。足場の悪い、急な坂道に足を取られながら歩かされました。父は背負ったリュックサックの上に私を乗せ、姉の手を取り、母は妹を背負い兄の手を取り、祖父母や叔父・叔母は荷物を抱え、黙々と歩いたそうです。収容所は女学校でした。建物の中に入れない人はテントでした。収容所の食事は乏しく、黒パンと塩スープのみ、体力の無い人は「飯が食べたい」と言いながら亡くなりました。亡くなった人は集められトラックに積まれ運ばれていきました。

その後、日本の船が迎えに来ました。そして辿り着いたのが北海道の函館でした。やっと着いた、皆涙を流して抱き合いました。

私たちは根室に向かいました。根室では11人の家族が一緒に住む家が無いので、親戚の家や母の実家に分かれて住むことになりました。以来、私たちは一度も家族全員で生活することができないまま、今日に至りました。私にとって島は家族全員で暮らした唯一の場です。

⑤　故郷への想い

先に話しましたが、私の曽祖父は江戸末期島に渡り、4代に渡り島で生活していました。曽祖父は祖母の父親でした。島生まれの祖母は、栃木から島に渡って来た祖父と結婚しました。

ある年、島は春になっても海が荒れ定期船が立ち寄れなく、島民が備蓄していた米が底をつく状態になりました。島の有志が根室まで米を買いに行くことにしたそうです。根室で米を買い島に帰りましたが、島を目前にし、島民が見守る中船は波の飲まれ、沈みました。その中に曽祖父がいたのです。祖母は引き上げるまで、月命日には船が沈んだ丘の上から冥福を祈っていたそうです。そんなわけで一家の中で島への思いは祖母が一番強かったのです。

祖母は「あの島は俺の島だ。もう一度島に戻り家族全員で暮らすんだ。」と言い続けました。島のことや家族の生活を良く話してくれました。私は島を見てそんなに帰りたいのか。どうしてそんなに拘るのかと不思議でした。

強制送還されて20年後の冬、祖母は納沙布岬に近い川に身を沈めました。島に帰りたい思いをあんなに抱いていたのに何故。島を追われ、大切な息子も失った。祖母の心はボロボロだったのでしょうか。私は祖母があんなに帰りたがった島に帰る努力をしようと心に誓いました。

故郷の島に立って

現在、北方領土への訪問は、元島民の墓参・元島民の自由訪問、それにビザなし四島交流です。四島交流では、歯舞群島を訪れることが出来ません。それは一般のロシア人が住んでいないからです。従って墓参と自由訪問の枠で故郷を訪問します。墓参に参加できるのは先祖が島に埋葬されていなければなりません。自由訪問は、島に居住していた方々の関係者が訪問できます。

平成元年、墓参団員として生まれ故郷に渡りました。島の浜辺で耳にしたのは波の音と波が運ぶ小石の音でした。母がお嫁に来た時に、波の音が耳に付き眠れない日が続いたと言っておりました。この音だ・・「故郷の音」です。小石を両手ですくいました。私の「故

郷です」祖母があんなに帰りたがった島です。止め処も無く涙が流れました。出来ることなら「家族全員で来たかった」。拾った石は今も身につけています。挫けそうになった時に勇気を与えるお守りの石です。島を離れる時に海水をすくい口に含みました。海水ですから塩辛いのは当たり前ですが、私たち島民の人生のように苦かったです。

２年前に自由訪問で島に行きました。その時、団員の中に目が不自由な方と杖を付いた80歳を超えたご老人も参加しました。歯舞群島はどの島も上陸するには洋上で二回船に乗り換えなければなりません。大変危険です。悪天候で波が高く、故郷の島を前に上陸は困難な状態でした。止む無く一日目は上陸予定地を変更しました。二人は甲板でジッと島の方を見ていました。ご老人は「杖を付き、歩くのもままならない。皆に迷惑をかけるが死ぬ前にどうしても故郷の島に来たかった」と一言。明日波が収まることを祈りました。翌日、波のうねりは収まっていないが、予定通りに上陸する事になりました。全員で抱えるようにして洋上の乗り換えを補助しました。やっと無事上陸できました。

目の不自由な方は、奥さんと孫が寄り添い石原をゆっくりと進みました。背丈を越える草が生い茂る急な傾斜地は、若い団員が手を取り前に進みました。やっと見晴らしの良い草原に辿り着きました。大きく息を吸い、故郷の香りを確認していました。「川はどっちに見える？斜め左の方だ。」団員が彼の手を取り方向を知らせました。「それなら此処が我が家の跡地だ」彼はジッと佇んでおりました。目には見えないが、心の目は故郷を映し出していたのでしょう。

杖を付いたご老人も、家の跡に行くことが出来ました。島を離れる時に、二人は何時まで甲板に立ち尽くして降りました。ご老人の姿が祖母と重なりました。

昨年も墓参団の一員として島に行きました。草生やす丘の上から海に向かい、祖母の思いも含めて手を合わせました。なんでこんな辛い思いをしなければならないのでしょうか。島に帰りたいと言い続け、亡くなる人がこれ以上増えないうちに解決して欲しいです。

まとめ

北方領土を故郷にする私たち島民は、皆一緒に島に帰ろうと励ましあい生きてきました。北方領土は、択捉・国後・色丹・歯舞群島の四島です。昨今、切り離して協議されそうなことも聞こえてきますが、こんなことがあってはなりません。そして、北方領土は私たち島民のみならず、大切な日本国民の領土です。皆さんの島です。自分の国の問題としてしっかり受け止め、本日の話しを少しでも活かして、ご婦人らしい発想で返還要求運動に取り組んでいただきたくお願い申し上げます。

先ほど話しましたが、温泉が沢山湧き出ます。別府温泉も良いでしょうが、島の温泉を堪能できるようになっていただきたいです。



元島民二世の訴え



島への想いを継ぐ

神　林　美　砂さん

私は、根室で生まれ根室で育ちました。母は歯舞群島・志発島の出身です。

子供の頃、納沙布岬から見えるあの島々には大きくて怖いロシア人が住んでいると思っていました。根室では小学校の高学年になると社会の時間に「北方領土」の授業があり地理的なこと、歴史、戦前の暮らしぶりなどを学びました。

この大分での語り部が私の初めての語り部となります。よろしくお願いいたします。

大分・別府でお話をさせていただくことになり、四島（しま）と結びつくものはないかと考えました。すぐに見つかりました。それは温泉です。

島には活火山が多く、温泉がたくさん沸き出ています。現在ロシア人の住んでいる地域は限られているのでまだまだあると思いますが、私がビザなし交流の際、行ったことのあるところを紹介します。

国後島の羅臼山から出る温泉は、温泉が流れる熱い川と普通の川の合流する所に穴を掘ったものです。湯加減は石を積み上げて水とお湯の量を調整しています。林道を30分ほど歩いたオホーツク海に近いところにあります。ロシア人は水着を着けて入りますが、脱衣所もない本当に自然のままの温泉です。

択捉島では中心地から車で約10分ほどのオホーツク海の海岸に、パイプで温泉をひき、コンクリートの小さな四角い桶に貯めていた所がありました。ここは昨年足湯や東屋などが造られ島民の憩いの場として整備されていました。また、指臼山（サシウスヤマ）という山の中腹には本格的な温泉施設が造られました。

どちらの島も地熱発電所ができ、居住している地域に電気を供給しています。温泉や地熱は、心や体を癒すとともに、大切なライフラインなのです。

私は、ビザなし交流の始まった年に島に行く機会を得ました。先ほどお話したような子供の頃のイメージのまま参加しました。とにかく行って見てみよう。と思いました。

初めて見た国後島・古釜布（ふるかまっぷ）。湾にはたくさんの沈船が放置され、見える建物は潮風にさらされた古い建物ばかり。廃墟のように見えるこの島をなぜロシアは返さないのか。これが「知床旅情」の「遥かくなしり」なのか。さび色の景色を見て一番初めに感じたことです。択捉も色丹も同じような印象でした。

天気が良くなると、青い空、あふれる緑…すばらしい自然を感じることができました。

ロシア人も明るく、子供のころから持っていたイメージを捨てるのにはそれほど時間はかかりませんでした。

この初めての訪問で私は択捉島出身のおじいさんに出会いました。

私たちは運悪く嵐に合い、択捉島のオホーツク海側で丸一日停泊することになりました。そこはおじいさんの故郷の村の沖合いでした。嵐に合わなければ目にすることもなく、夜中に航行するはずの場所でした。

大きく揺れる船で、島のことをたくさん話してくれました。そしてずっと島を、故郷を見ていました。天候が回復し夜中に船は碇をあげました。おじいさんは真っ暗なデッキに出て、島に眠る家族に「般若心経」を唱えたと翌朝聞きました。

私はおじいさんに言われました。「ねねこ～（おねえちゃん）、オレはもう（島に）来れない。後は頼むぞ。」「そんなことないよ、また来れるから。」と返しましたが、胸がいっぱいになりました。島への想いを見聞きし、感じたからです。

私は2007年に家族で初めて志発島の元居住地に行きました。同じ地区に住んでいた人たちが「ここ、あんたのトコ。」と教えてくれたり、初対面の人から亡くなったおじやおばの話を聞きました。

占領された1945年９月には、母の家族は祖母の姉のところに皆行っていて島には誰もいませんでした。でも、祖父の大きい船が沖留めされていて、ソ連兵が島の反対側に行っている時にその船で女・子供だけでも根室に逃がそうということになり、地区の人たちが乗れないほど集まったので、さらに小船を引き、船は根室に向かったそうです。占領後初めての多勢の引き上げということで、島の様子を知りたい役所やマスコミが船を迎えたそうです。

その船に乗っていた一家の末の妹さんが私に言いました。「私は島を出てから生まれたのだけれども、あなたのおじいさんの船に家族が乗らなかったら、私は今ここにいなかったかもしれないのよ。」と。

志発島には何もありません。ロシアの国境警備隊が駐屯し、エビの漁期にだけ来るロシア人がいるだけです。ビザなし交流に参加した時も同様ですが、元島民の方々はただただ島を見ています。私たちには見えない昔の景色や、家族を見ているのです。その想いが伝わるほど切なくなります。私はできる限り現地で元島民のお話を聞くようにしています。想いをより強く感じるからです。

私たち元島民２世や３世は「後継者」と呼ばれています。この呼ばれ方は好きではありません。一日も早く解決して欲しいのです。65年経っていることの後を継ぐなんて。という思いです。でも現実問題としてまだ時間がかかるのなら、２島や面積ではなく、北方領土は４つで「北方領土」であるということを崩さず、今日お話させていただいた「島への想い」という心の核をしっかり継いで今後も返還運動していくことです。それぞれの元島民が抱いている「島への想い」を聞き伝え、力にしたいのです。

島を返せと言うが、日本人は今更この便利とは言えない島に住めるのか？と聞くロシア人もいます。そういう理屈ではないのです。故郷だから帰りたい。ただそれだけなのです。

「想い」を持って運動することはまた新たな力になると思います。そして一日も早くこの問題が解決することを信じお互い頑張っていきましょう。この「想い」はこの後児玉さんがお話してくださいますので、皆さん充分感じて今後の活動の心の核としていただきたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。



北方領土返還要求運動

北方領土返還運動について

社団法人北方領土復帰期成同盟　参事　**梶　　武　廣**

皆さんこんにちは。只今ご紹介を頂きました北方領土復帰期成同盟の梶でございます。

本日は、大分県地域婦人団体連合会のご厚意により、外務省主催の「元島民の語る会」がこのように多くの皆様のご参加を得て開催することが出来ますことを厚くお礼申し上げます。

また、日頃から北方領土返還要求運動を、県民の先頭に立ってご尽力されていることに対し、深く敬意を表します。

「元島民の語る会」は、外務省が主催し、北方同盟が実施している事業で、元島民や二世の方から、北方領土の様子やそこでの暮らしなどを語ってもらい、北方領土が、私たち日本国民が父祖伝来の地として受け継いできたことを再認識し、北方領土問題の喚起・高揚を図るという目的で、毎年、各県において実施しております。

折角の機会ですので、貴重な時間をお借りして、北方同盟が進めております「北方領土返還運動」につきまして、ご紹介をさせて頂きます。

お手元にお配りしております、「北方同盟の組織と事業の概要」を、ご覧いただきたいと思います。

はじめに、「北方同盟」についてですが、１ページ目をお開き下さい。

見開きの右下に、北方同盟の沿革が書いてあります。北方同盟は、北方領土返還運動を主たる目的とした、外務大臣許可の公益法人でございます。

さて、北方領土でございますが、お手元の「語る会のパンフレット」の裏表紙をご覧下さい。

ここに、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の地図が描かれております。

この四島は、大きな島です。それぞれの面積は、択捉島3,184平方キロメートル、国後島1,499平方キロメートル、色丹島253平方キロメートル、歯舞群島100平方キロメートルで、４島合わせて5,036平方キロメートルもあります。

数字を聞いても大きさが解りにくいと思いますが、大分県の面積が約6,339平方キロメートルですから、四島を合わせると大分県よりも二回りちょっと小さい面積となりますが、沖縄本島の1,206平方キロメートルと比べてみると、国後島や択捉島が大きな島だということが、お分かりになっていただけると思います。

北方四島は、第二次世界大戦が終戦したにもかかわらず、1945年８月下旬から９月上旬にかけて、ソ連が不法に占領したことが、北方領土問題の始まりであります。

この不法占領に対し、その年の12月、当時の根室町長安藤石典（あんどういしすけ）氏が、不法に占領された四島は、日本固有の領土であることを、連合国の司令官マッカーサー元帥に直訴したことが、返還要求運動の始まりでございます。

北方領土が返還されないことは、我が国の主権を損なう基本的な問題ですが、地域社会にも大きな影響を与えております。

漁業に目を転じてみますと、北方領土周辺海域で日本の漁船の拿捕事件が続発していることは、ひとえに、北方領土問題が解決されていないことに起因があり一日も早い解決が望まれます。

皆様ご承知のとおり、政府においては「北

方四島の帰属に関する問題を解決して、平和条約を早期に締結する」との、一貫した基本方針を堅持し、精力的に外交交渉を続けてきており、特に昨年の政権交代以降、首脳レベル、外相レベルでの会談が頻繁に行われるようになりました。

北方同盟としましても、これまで以上に関係機関、団体との連携を強化し返還要求運動に取り組むとともに、政府の外交交渉を強力に支えて行くこととしております。

では、北方同盟の主な事業をご紹介したいと思います。

今一度、お手元の「組織と事業概要」4ページを開いていただきたいと思います。

Ⅰ世論の結集と啓発活動、Ⅱ返還要求運動推進活動、Ⅲ後継者育成活動の三つの柱立てをして、事業を進めております。

このうち、Ⅲ後継者育成活動について、ご説明させていただきます。

北方領土が不法占拠されて64年、返還要求運動は長期に及び、運動関係者の高齢化が進んでおり、それとともに活動の低下や、運動の形骸化が危惧されております。

引き続き返還要求運動を推進するためには、若い世代の方々に北方領土問題を正しく理解してもらい、返還要求運動を引き継でいくことが大切です。

後継者育成事業についての取り組みの１つ目は、「北方領土問題教育研究セミナー」です。

これは次世代を担う青少年に、教育現場で北方領土問題を正しく理解してもらうため、全道の小中学校の教師を対象に、教育セミナーを開催することとしております。

２つ目は、「第24回“北方領土を考える”高校生弁論大会」であります。

北方領土問題に関心を高めてもらうため、全道の高校生を対象に弁論大会を開催しております。

なお、この弁論大会で最優秀賞及び優秀賞を受賞した生徒は、後日、総理大臣を訪問し、総理に弁論大会の報告をするとともに、激励を受けることとなっております。

次に３つ目ですが、「北方領土学習資料の作成」です。

文部科学省の学習指導要領では、小学５年生から北方領土が学習対象となっていることから、北方領土問題の正しい知識と理解を深めてもらうため、「小学生向け学習資料」を作成し、道内の小学校５年生全員に配付しております。

最後に４つ目、「北海道北方領土教育者会議」でございます。

これは、道内の小・中学校での北方領土問題に関する教育の推進に向け、道内の北方領土教育における研究・実践者のネットワークを構築すると共に、北方領土教育を促進する環境の整備を図っております。

以上、北方同盟が進めております北方領土返還運動について、雑駁ではございますが、ご説明させていただきました。

なお、このパンフレットの裏表紙に北方同盟のアドレスを記載いたしておりますので、是非、皆様方にホームページをご覧頂ければと思います。

最後に、北方領土、いわゆる択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島は、日本固有の領土であり、日本国民が開拓し、住んでいたところです。北方領土問題は、今日お集まりの皆様方をはじめ、全ての日本国民の問題です。どうか、そのことを忘れないで下さい。何かの折に思い出して下さい。

国民一人一人の返還への願い、これが外交交渉の下支えとなっているのです。

皆様方には、今後とも北方領土返還要求運動へのご理解とご協力をお願い申しあげ、説明を終わります。

ご静聴、ありがとうございました。

3　平成21年度「元島民の北方領土を語る会」開催要綱

1　趣　旨

択捉島、国後島、色丹島及び歯舞群島からなる北方四島は、我が国民が父祖伝来の地として受け継いできたもので、いまだかって一度も外国の領土となったことのない、我が国固有の領土である。

1956年、日ソ共同宣言が署名され、両国間に国交が再開されてから既に50年以上が経過した。この間、我が国は、両国間の最大の懸案である北方領土問題を解決して平和条約を締結することにより、我が国の重要な隣国との間に真の相互理解に基づく安定的な関係を確立するという基本方針を一貫して堅持し、粘り強くソ連及びロシアに働きかけてきているが、未だ不法に占拠された状態が続いている。

領土は国家、国民にとって基本的な問題であり、今後の日露関係を真に安定的になものにするためには、是非とも北方領土問題の早急な解決が必要であり、そのためには、北方四島が当然我が国に帰属している領土であることについて、国民一人ひとりが正しい認識を深めていくことが重要である。この観点から、北方領土元島民及び元島民二世が自らの体験を通して北方領土が我が国固有の領土であることを訴え、北方領土問題の早期解決を目指し一層の国民意識の高揚を図る。

2　主　催

外　務　省

3　実施団体

社団法人北方領土復帰期成同盟

4　後　援

社団法人千島歯舞諸島居住者連盟、全国地域婦人団体連絡協議会

5　開催時期・場所

開催時期	開催地	開　催　団　体	開　催　場　所
21年６月10日(水)	宮崎県	宮崎県地域婦人連絡協議会	宮崎市　宮崎県婦人会館
21年７月28日(火)	山梨県	山梨県連合婦人会	富士吉田市　ハイランドリゾート
21年11月19日(木)	北海道	北海道女性団体連絡協議会	札幌市　かでる２．７
22年１月26日(火)	香川県	香川県婦人団体連絡協議会	高松市　香川県社会福祉総合センター
22年２月９日(火)	大分県	大分県地域婦人団体連合会	別府市　中央公民館

6　開催内容

(1) 説　明

内　容　北方領土返還要求運動について

説　明　北方領土復帰期成同盟（10分）

(2) 元島民の訴え

テーマ　北方領土の早期返還を求めて

内　容　北方領土の戦前の模様、ソ連軍の侵攻、強制引揚げ、返還運動取組状況、北方領土返還に向けた決意等について訴える

語り手　北方領土元島民二世（20分）
　　北方領土元島民（40分）

7　開催方法

５の開催団体が各種の大会、研修会等を実施する際にこれらの行事のプログラムに繰り入れて開催する。

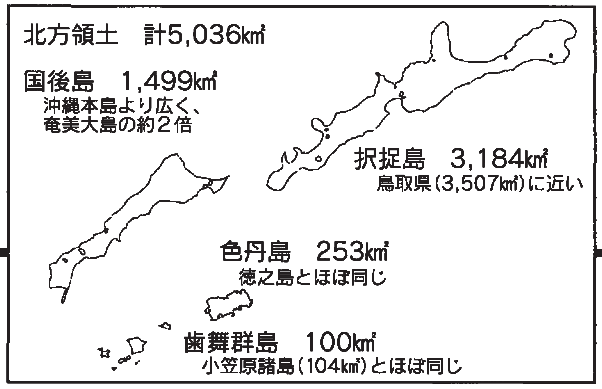
8　開催経費

元島民及び元島民二世の派遣経費並びに会場設営費及び消耗品費等の一部を開催経費として外務省予算から負担する。（それ以外は、開催団体負担）

平成21年度
元島民の訴え　北方領土の早期返還を求めて
第20回「元島民の北方領土を語る会」集録

発行／平成22年３月
編集／社団法人 北方領土復帰期成同盟
〒060-0031
札幌市中央区北１条東１丁目
明治安田生命札幌北１条東ビル
〔TEL（011）205-6500　FAX（011）205-6501〕
ホームページ：http://www.hoppou-d.or.jp
e-mail：hoppou-d@isis.ocn.ne.jp
印刷／正文舎印刷株式会社

私たちが「北方領土」と呼ぶのは、
択捉島・国後島・色丹島・歯舞群島（多楽島、志発島、
勇留島、秋勇留島、水晶島、貝殻島など）の四島です。



四島（しま）返還　日口の明日を　ひらく鍵

（平成21年度　北方領土問題対策協会最優秀賞標語）